

大正國語讀本

修正版

卷二

J159
H019
資料室



42014
教科書文庫

4
810
41-1918
200030 2238

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

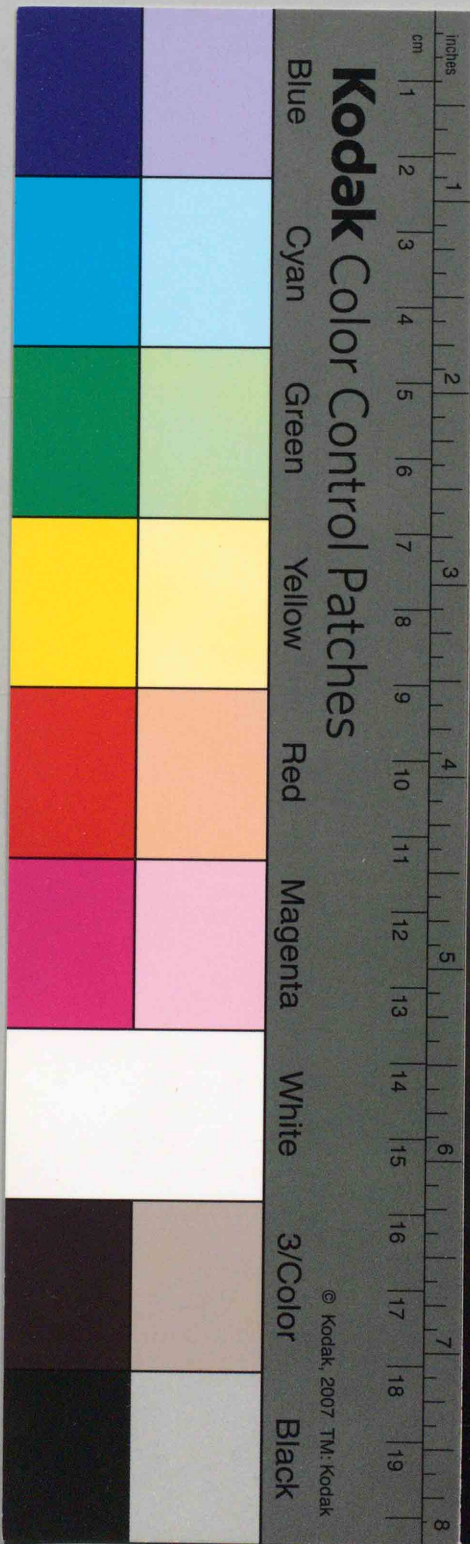


© Kodak, 2007 TM. Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak



資料室
日壹十二月二十年七正太
濟定檢省部文
用科教科語國校學中

3759
H019

保科孝一編 修正版

大正國語讀本
廣島大學 教 38327

東京 會社 育英書院 發兌

大正國語讀本(修正版)卷二

目次

- 一 明治天皇御製(韻文).....
- 二 歌聖としての明治天皇その一.....佐佐木信綱.....五
- 三 歌聖としての明治天皇その二.....九
- 四 江戸の發達.....芳賀 矢一.....一三
- 五 江戸城明渡しその一.....(氷川清話).....一八
- 六 江戸城明渡しその二.....二五
- 七 五賢堂.....古谷久綱.....三〇
- 八 廣瀨中佐(韻文).....巖谷小波.....三五

目次

九 膽力の養成……………嘉納治五郎…三八

一〇 極地の探検その一……………新保磐次…四五

一一 極地の探検その二…………………………五一

一二 膠州灣より兩親に送る(候文)……………小岩義雄…六〇

一三 青島入城式その一……………(小敵大敵)…六五

一四 青島入城式その二…………………………七一

一五 比叡山上の眺望……………杉村廣太郎…七八

一六 二宮翁夜話……………(二宮翁夜話)…八三

一七 己を省みよ……………柴田鳩翁…八七

一八 三種の生活……………和田垣謙三…九三

一九 越路の雪その一……………(家庭枯野の雪)…九七

二〇 越路の雪その二…………………………一〇一

二一 義士の討入その一……………村上浪六…一〇八

二二 義士の討入その二…………………………一一三

二三 義士の討入その三…………………………一二八

二四 リンカーンの少年時代……………(アブラハム、リンカーン)…一二五

二五 樂翁公の幼時……………三上參次…一三六

二六 父に贈る(候文)……………高山林次郎…一四四

二七 米國の風物……………水上瀧太郎…一四七

二八 ダンケルクの一夜その一……………杉村廣太郎…一五三

二九 ダンケルクの一夜その二…………………………一六〇

三〇 水車(韻文)……………尾上柴舟…一六六

三一 伊能忠敬の晩學その一……………幸田露伴・二六八

三二 伊能忠敬の晩學その二…………………………一七三



大正國語讀本(修正版)卷二

一 明治天皇御製

とこしへに民安かれと祈るなる

我が世を守れ伊勢の大神

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

我が民草のうへはいかにと

兒等は皆戰の場に出ではて、

翁やひとり山田守るらん

四方の海みなはらからと思ふ世に

などなみかぜの立ちさわぐらん

暁のねぞめ靜かに思ふかな

我がまつりごといかゞあらんと

賤の男がひとり引きゆく小車の

重荷の上につもる雪かな

久しくも我が飼ふ馬の老いゆくを

惜しむは人にかはらざりけり

つかさ人まかでし後の夕まぐれ

こゝろしづかに書を見るかな

とのゐ人語らふ聲も絶え果て、

更け行く夜半に水鶏鳴くなり

池水に小舟うかべて遊びつる

昔こひしきふるさとの庭

星のとぶ影のみ見えて夏の夜も

ふけ行く空は寂しかりけり

夕づく日かげろふ森の木隠れに

ひぐらし鳴きて秋風ぞふく

二 歌聖としての明治天皇その一

佐佐木信綱

新しき日本帝國の建設者にましまし、古今東西に比ひまれなる英主におはせしわが明治天皇が、同時にまた、我が國風なる和歌の道に御志ふかく、かつ御堪能にあらせられ、吾等國民が精神上の糧たるべき幾多の作品を遺させ給へるこそ、畏くも吾等の限りなき喜とする所にはあなれ。

天皇の御治世は、前後を通じてわが日本帝國の歴史

上最も多事の時代と稱しまつるべきものなりき。而して、まづ内は徳川幕府の瓦解、外は外國との交渉の發生等、所謂國步艱難を極めたる間に、新日本の建設てふ未曾有の大事業を行はせ給ひ、憲法發布、日英同盟、日清、日露の二大戦役、韓國併合等、國家の大事事件に親しく當らせ給ひ、終に我が國をして今日見るが如き國家的地位を贏ち得させ給へる御功績と、畏くも終始御身を以て國家とせさせられ、かゝる内外多端の御治世の間に、ひたすら精勵國事に盡し給ひ、御生涯を通じて變らせたまふことおはせざりし御徳

とは、日月とともに千世萬世に輝きわたりぬべし。しかも天皇は、さる御多忙、御恪勤を極めさせ給へる御日常の間にも、ゆたかに大いなる御心よりして、常に御思を言の葉の道に寄せさせ給ひ、幾多のすぐれたる御製を遺させ給ひて、帝王の詩人てふ御名を、遠く異國の國民の間にも稱へられさせ給へり。げに畏くも吾等が洩れ承るを得し御製を拜誦して考へ奉るも、天皇の御作歌に於けるや、まことに卓越なる御才におはして、たゞにその數に於てたぐひなくおはしますのみならず、御秀逸に富ませ給へることも

比ひなくおはしましき。由來和歌は我が國の歴史と共に起り、歴史に伴ひて榮え、随つて和歌と皇室とは最も關係深く、御歴代の天皇中、九十餘代の天皇の御製は歴史又は歌集に遺り、また御集の傳はれるも尠からず。中にも、神武・仁德・聖武・醍醐・崇德・後鳥羽・土御門・順德・龜山・花園・後醍醐・後柏原・後水尾・靈元の諸天皇は、いづれも歌仙にましまししが、これら御歴代の天皇に並べ奉りても、明治天皇は明かに歌人として優秀の地位に居させ給へり。

三 歌聖としての明治天皇その二

天皇が歌に就いて抱かせたまひし御聖慮は、所謂眞心を重んぜられ、それを歌の生命とあそばされしにて、さる御思想は次の御製によりてもうかがひ知るを得べし。

おもふことうちつけにいふ幼子の

言葉はやがて歌にぞありける

まごころを歌ひあげたる言の葉は

ひとたびきけば忘れざりけり

歌に對してかくの如き御聖慮を抱き給へりしこと

とて、天皇は真情流露、自然の妙趣を味ふをもて歌の理想とし給ひ、かつ御製に於て十分にこの旨を得させ給へり。

足引の山の端出づる月かげに

大うなばらの波を見るかな

浪の上に朝日にほひて鏡なす

あをうな原は明けはてにけり

家なしとおもふ方にもともし火の

かげ見えそめて日は暮れにけり

の如き、自然・真率のうち、自ら感情のゆたかなるを

おぼゆるの御傾向著く拜せらる。

最も我等の感じ奉るは、天皇が畏き大御心よりして、或は國家をおぼし給ひ、或は祖神を敬ひ給ひ、或は國民を慈み給ひ、或は御修養はた御訓誡の意を詠じ給へりし御製なり。由來この種の歌は、或は説明に流れ、或は理に落ち、歌として趣乏しきもの多かるが習ひなれど、御製に至りては、いづこまでも高き調と、雅びかなる趣とを失はせ給はずして、しかもその御意ふかし。これ蓋し此の種の御製が、天皇の高く大いなる御人格の自然の發表にましまししが故にして、

その高風氣品に至りては、到底他の學び奉るを得ざる所、この種幾多の御製は、吾等國民の心に大いなる教訓として永久の價值を有すべきこと、恰もかの古經典の一言一句にも比し奉るべきものといふべし。しかも御製全體を通じて我等が感じ奉る所は、一種雄々しく高く豊かに、かつ廣やかなる御調なり。たとへば、麗かに晴れたる空に、高鳴る山松風を聞くが如く、讀む者をして、その高明悠容なる御調に自ら引入れられては、知らず識らず大いなる王者の威徳に身の浴化せらるゝを覺えしむ。是ぞまさしく、高貴

博大なる御人格の自然の發露にして、天皇が歌人として有せさせ給ふ獨歩の御特質と稱へまつるべく、感歎景仰しまつるに堪へざる所なり。(やまと心)

四 江戸の發達

芳賀 矢一

江戸城落成(三二七)
長祿元年四月
八日足利將軍
義政の時。
家康入城(三三〇)
天正十八年。
太田道灌が千代田・寶田・齋田の地を檢べて、江戸の城を築いたのは、今から四百五十餘年の昔、家康が覇府を江戸に開いたのは、それから百五十年程も後である。道灌の靜勝軒は、我が庵は松原つゝき海近く

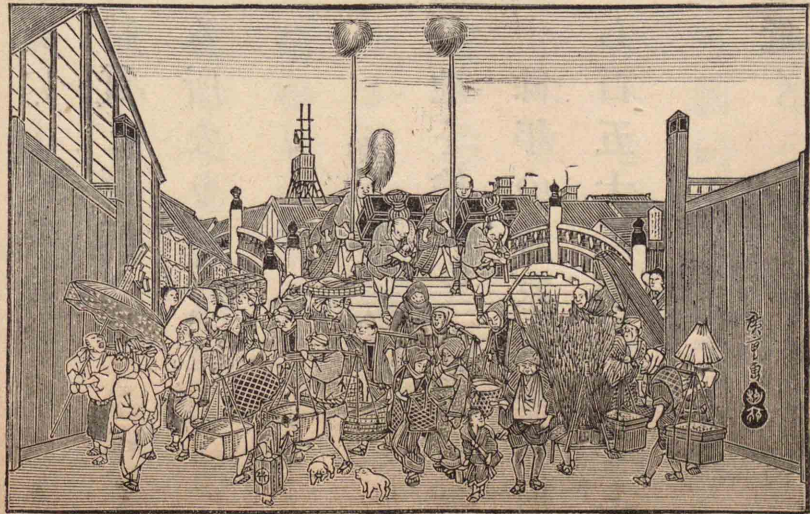
富士の高根を

軒端にぞ見る

といつたので、其の打開いた眺望の様子が知られるが、家康入府以後は、俄かに町屋が立並んで繁昌して来た。けれども皆草葺ばかりであつた。慶長六年十一月の大火事で、江戸中一軒も残らず焼けたので、

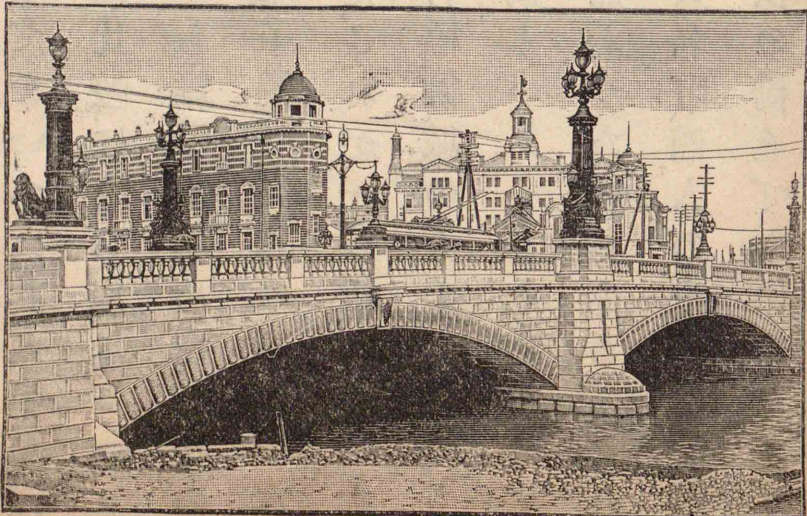
慶長六年
(三三三)
家康入城より
十一年目。

昔の日本の本橋



此の序に板葺にせよといふ御觸れが出た。其の時に瀧山彌次兵衛といふ男、表棟半分を瓦で葺き、後半分を板で葺いたのが大評判となつて、本町二丁目の瀧山彌次兵衛は、家を半分瓦葺にしたさうな、奇特な事ぢやと、半瓦彌次兵衛といふ綽名を得た。是がそ

今の日本の本橋



もく、江戸市中の瓦葺の始だといへば、其の頃の江戸はとても今日の東京とは比較にならぬ。

朝鮮人接待のために諸國から雉子を集めた。その鳥屋の近處にあつた橋が雉子橋で、又其の下に一本の丸木を渡した橋があつた、これが一つ橋、又其の次に竹を編んで渡した橋が竹橋、御城の大手に稍、大きな橋があつたから、是は大橋といふくらゐのもので、城まはりの橋も實は名も無かつたのである。それが僅かの後の萬治頃には、大名町、商人の市の棚、諸職人の家々、小路々々、町々、縦横の橋までもにぎやかさ、

萬治

(三二〇—三三〇)
四代家綱の時の年號。

元祿

(三三〇—三六二)
五代綱吉の時の年號。

鐘一つ云々
其角の句。

明暦

(三三三—三三七)
明暦三年正月
大火。丸山火
事と云ふ。

人の往來黒土を蹴上げて、よそ見をして通る者は突倒され、踏轉ばされ、口をあきてゐるものは、息のつまるほど砂ほこりを吹入れられる。」とあつて、元祿時代になると、

鐘一つ賣れぬ日は無し江戸の春

の繁華となつた。

死者十萬八千人を出したといふ明暦の大火を始め、幾回となき大火災も、大都の勃興的氣運には打勝つことが出來ない。「火事は江戸の花」と歌はれて、焼けた」といふ語は、市民をして火事を何とも思はせな

かつた。元祿時代の繁昌といつても、馬喰町の近傍には、まだ宿屋が十軒位あつたばかりだといふが、江戸の町は焼け太りに益太つて、隅田川の三角洲の發達と共に、郊外も次第に都會に接近して、世界屈指の大きな都となつた。さうして明治になつて、日本帝國の首都となる用意をしてゐたのである。

(東海道五十三次)

五 江戸城明渡しその一

自分は、今までに天下で恐ろしい者を二人見た。そ

れは、横井小楠と西郷南洲とである。



勝海舟

初めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰せ付けられた時で、場所は大阪の旅宿であつた。その時、西郷は御留守居役格であつたが、轡の紋の附いた黒縮緬の羽織を

着て、中々立派な風采であつた。

坂本龍馬が來て、先生が屢、西郷の人物を賞せられる

ので、拙者も會つて見たいから、添書をかいてくれ。」といつた。早速書いてやつたが、その後歸つて來て云ふには、「成程西郷といふ男はわからぬ男だ。小さく叩けば小さく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらう。」といつたが、坂本も中々鑑識のある男である。西郷の偉い處は大膽識と大誠意とにある。自分の一言を信じて、たつた一人で江戸城へ乗込んで來た。自分も事を處するには、多少の權謀を用ひないでもないが、唯この西郷の至誠に對しては、それを用ひる

事が出來なかつた。この時に際して、小籌淺略を事とするのは、却つてこの人に腸を見すかされる計りだと思つて、自分も至誠を以て之に應じたから、江戸城の受渡しも、あの通り立談の間に濟んだのである。西郷は坂本の評した通り、實に漠然たる男であつた。幕府が倒れて、新政が未だ布かれず、ちやうど無政府の姿になつてゐた處へ、官軍が乗込んで來たのだから、江戸市中の取締が甚だ面倒になつて來た。然るに大量な西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局を自分の肩に投掛けて、後は勝さんがどうかなさるだ

らう。」といつて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる「だらう。」には自分も實に閉口した。これが普通の男なら、これはかう、あれはあゝ、とそれ／＼談判して置くだらうに、さりとは餘り漠然ではないか。併し考へて見ると、西郷の天分が極めて高い所以は、こゝにある。西郷はどうも人にわからない所があつた。小さい人物なら、どんなにしたつてすぐ腹の底まで見えてしまふが、大きい人物になるとさうでない。西郷の大度・洪量に就いて、維新當時の模様を、今少し細かに話さう。官軍が品川まで押寄せて來て、今に

も江戸城へ攻入らうといふ際に、西郷は、自分が出した僅か一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷まで、のそのそ談判に遣つてきた。なか／＼今の人では出來ない事である。

あの時の談判は實に骨であつた。官軍に西郷が居なければ、話はとても纏らなかつたのだらう。その時分の形勢といへば、品川からは西郷などが來る、板橋からは伊知地などが來る、江戸の市中では、今にも官軍が乗込むだらうと大騒ぎをしてゐた。しかし自分は外の官軍には頓着せず、たゞ西郷一人を眼中

品川
東海道の江戸
への入口。
板橋
中山道の江戸
への入口。
伊知地
名は正治。

においた。

そこで、今話した通り、極短い手紙を一通遣つて、「双方何處にか出會つた上で談判したい。」との旨を申し送り、其の場所は、田町の薩摩の別邸がよからう。」と、此方から選定してやつた。すると官軍からも早速承知したと返事をよこして、いよく薩摩屋敷で談判を開くことになつた。

當日自分は、羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたばかりで薩摩屋敷へ出掛けた。まづ一室へ案内せられて、暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服

に薩摩風の引つ切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來て、「これは實に遅刻しまして失禮。」と挨拶しながら座敷に通つた。其の様子には、少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

六 江戸城明渡しその二

さて愈談判になると、西郷は、自分のいふ事を一々信用してくれ、其の間一點の疑念も挟まなかつた。「色色むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけ

て御引受します。」西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈は、その生命と財産とを保つ事が出来、また徳川氏はその滅亡を免れたのである。若し之が他人であつたら、「いや貴様のいふ事は、自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の兇徒があゝの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何所にあるか。」とか、「いろく、喧しく責立てたに違ひない。萬一さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷はそんな野暮はいはない。その大局を達觀して、而も果斷に富んで居たのには、自分も感心した。

殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終坐を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光でもつて、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつた事である。

その膽量の大きいことは、所謂天空海濶で、見識ぶるなどいふことは固より少しもなかつた。あの人見寧といふ男が、若い時分に自分の處へやつて來て、西郷に會ひたいから紹介狀を書いてくれ。」といつたことがあつた。所が段々様子を聞いて見ると、どうも

西郷を刺しに行くらしい。そこで自分は、人見の望み通り紹介状を書いてやつたが、其の中に「この男は足下を刺す筈だが、兎も角も會つて遣つてくれ。」と認めておいた。それから人見はぢきに薩州へ下つて、まづ桐野^{*}に面會した。桐野も流石に眼がある。人見を見ると、その舉動が如何にも尋常でないから、私かに彼の西郷への紹介状を開封して見たら、果して今の始末だ。流石に不敵の桐野も、之には少しく驚いて、直様委細を西郷へ通知してやつた。ところが西郷は一向平氣なもので、勝からの紹介なら會つて

桐野
名は利秋。

見よう。」といふことである。そこで人見は、翌日西郷の屋敷を尋ねて行つて、「天下の大勢に關するお話を承りにまゐりました。」といふと、西郷はちやうど玄關に横臥して居たが、その聲を聞くと悠々と起直つて、「私が吉之助だが、私は天下の大勢などいふむづかしいことは知らない。まあお聞きなさい、先日私は大隅の方へ旅行した。その途中で、腹がへつてたまらぬから、十六文で芋を買つて喰つたものだが、多寡が十六文で腹を養ふ様な吉之助に、天下の形勢などいふものが、分る筈がないではないか。」といつて大口を

開けて笑つた。所が血氣の人見も、この出し抜けの
話に氣を吞まれて、殺すどころの段ではなく、挨拶も
ろくく、得せず、歸つて來て、西郷さんは實に豪傑
だ。と感服して話したことがあつた。知識の點にお
いては、外國の事情などは、却つて自分が話して聞か
せた位だが、その氣膽の大きいことは、この通り實に
絶倫なものであつた。(永川清話による)

七 五賢堂

古谷久綱

客若し大磯の滄浪閣を訪はば、洋館より海岸に向つ

大磯
相州中郡の海
岸にあり。

小田原
相州足柄下郡
に在り。

四公

三條實美。
岩倉具視。
木戸孝允。
大久保利通。
皇太子殿下
今上天皇。
三島中洲
名は毅。文學
博士。宮内省
御用掛。

公
伊藤博文。

て一段低き處、東の方には小田原より移植せる無數
の梅樹槎枒として偃蹇せるを見ん。梅林中一堂宇
あり、方九尺、堂中東西の兩壁に三條岩倉木戸大久保
四公の肖像あり。南方の壁間高く皇太子殿下の御
筆に成る四賢堂の大額を奉掲す。北壁の一額は三
島中洲翁の四賢堂の由來を記せるものなり。
公の四賢を尊崇するの厚きは、親炙せる人々の熟知
する所なり。余は十年前、公に謁して日尙淺かりし
時、一日公に導かれて滄浪閣上の應接間に入りたる
に、此處にも四賢の肖像あり。公は余を顧みて曰く、

「此の四賢は予の先輩なり。四賢は各其の性質・傾向を異にしたれど、均しく予の畫策を最も良く採用してくれたる人々なり。」と語られし事あり。又兩三年前、公に陪乘して參内し、途二重橋前を過ぎし時、公は余に向ひ、敕許を得て此の邊に四賢の銅像を建設したきものなり。

伊藤博文



老健且千里外角寒字中書情三依
 孝順存節義在萬事生去社一才幼
 志時衆山陰會新少傳紅 志社山人

鐵筆

と語られたる事もあり。其の外、政客と談論する際、公が「斯くては予は四賢に對して、地下に相見ゆる面目無し。」と言はるゝを耳にしたる事屢なり。又以て公が四賢の後繼者たるを自任し、四賢の遺志を貫徹せんとする念慮の、如何に切實なりしかを見るに足るべし。

滄浪閣前に四賢堂を建設せられたるは、今より僅かに七年前なれども、公の腦中には、蓋し三十年前既に無形の堂宇を築きて、一賢簣を易ふる毎に、其の肖像は高く壁間に掲げられたりしならん。公在世の日、

四賢堂内には一個の洋卓と一脚の椅子とあり。卓上の花瓶には櫛を供へ、毎月朔望之を新にするを例とせり。公の滄浪閣に起臥せらるゝや、時にシガーを手にしたるまゝ、堂内に入り、悠然として椅子に就き、仰ぎて四賢の像に對し、俯して冥想に耽られたる事あり。公薨ぜし後、夫人、大森本邸にある公の靈を堂中に分祀し、朝夕神饌を供へて奉侍すること、生者に對するに異ならず。是に於てか四賢堂は、今や名實共に五賢堂となれるなり。(藤公餘影)

大森
武州在原郡に在り。

八 廣瀬中佐

巖谷 小波

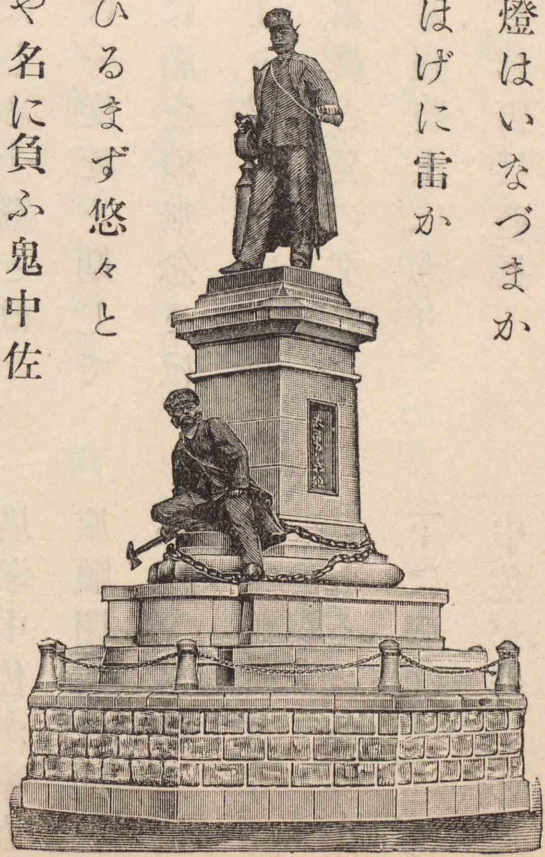
廣瀬中佐
名は武夫。

神州男兒かずあれど 男子のうちの眞男兒
 世界にしめす鑑とは 廣瀬中佐が事ならん
 すでに一度死を期して 旅順閉塞に向ひしが
 事意に満たぬ無念さは 夫た、び結ぶ決死隊
 もとより君に捧げし身 妻も迎へず子も持たず
 父の寫眞と兄の文 これぞはだへの守なる
 かゝる強將上にあり 下に弱卒などあらん
 中にも杉野兵曹長 中佐が無二の股肱なり
 上下心を一にして 入るや虎穴の奥ふかく

杉野兵曹長
名は孫七。

その大任はふな底に
探海燈はいなづまか
水雷はげに雷か

積める石より尙重し



長曹兵野杉と佐中瀬廣

中をひるまぜ悠々と
行くや名に負ふ鬼中佐
港口ふさぎて瀑沈し
兵曹長はいかにせし

任務はかくて果しゝに
姿も見えず影もなし

杉野はいづこ杉野よと
こだまと聞くは砲彈の
三たび求めて三たび得ず
促されつゝ本意なくも
時しもあれや轟然と
血煙船に立ちこめて
五尺の體の名残なる
忠血義血俠血の
あないさましの軍神
わが帝國や守るらん

呼べど答はあら海に
船にくだくる響のみ
かくては君も危しと
小船に移り乗らんとす
耳をつんざく敵彈に
中佐の姿はやもなし
たゞ一寸の肉塊は
千古に朽ちぬ寶ぞや
七度人とりまれきて
わが帝國や護るらん

九 膽力の養成

嘉納 治五郎

男子と生まれられた以上は、死生の境に出入しても、從容自若として、更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れかゝつても、悠然としてすましてゐるが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が落ちて、も、膽を冷し、色を失ふではないか。

膽力はその人の天稟にもよるが、また決して修養せられぬものではない。上杉謙信が、十四五歳の時、大

Nelson
英國の海軍司令官

敵に追はれて、門番所の板敷の下に潜伏しながら眠つて居たとか、徳川光圀が、六歳の時、暗夜に、刑場に往つて、死人の首を取つて來たとか、ネルソンが、幼時から、恐怖の何物たるかを知らなかつたとかいふのは、皆、天稟と見るべきものであるが、修養で剛膽の人となつた例も、亦決して少くない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衛門といふ名代の臆病者があつた。信玄は、どうかして矯正しようと考え、或日の戦に、彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて置いた。矢玉は雨のやうに飛

んで来る。砲聲は雷のやうに轟く。彼はその怖しさに、殆ど死人のやうになつてしまつた。しかし、幸にも一つも矢玉が中らなかつた。そこで、彼は飄然として、運さへあれば、矢玉も中らない、死は決して畏るべきものでないと悟つて、それからは、戦争毎に勇み戦つて、遂に武名を揚げたといふことである。

大藏左衛門が戦を恐れたのは、彈丸雨飛の危険を過大視したからである。危険災害の身に迫つた時、直にその結果を過大に豫想して、恐懼狼狽するのは、神性質な人ほどあり勝のことである。ところが、平素

修養あり、經驗あるものは、決して恐懼狼狽することはない。消防夫が、炎々と燃えあがる猛火の中に、泰然として立つのも、水夫が狂瀾怒濤の間に、自由に働くのも、皆、鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから、なるべく多くの鍛錬と經驗とを積むことは、膽力養成の有力な方法である。次には、あきらめるといふことが必要である。危険災害等の来る場合になるべく安全に避けようとするのは、人の眞情には相違ないが、それがために、却つて怯懦に陥る事があるものである。最もあらい結

果を身にひき受けても、是非に及ばぬと覺悟すると、
膽は自然にすわるものである。例へば、眞劍勝負を
する場合に、まづ身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を
切らせて、敵の命を取るといふ風に、死身になつた上
で、手段と伎倆とを盡す方が、命を惜しむものよりも、
自由がきくから、自然數倍の働をすることが出来る。
勝海舟は、膽力に富んだ人で、白刃を踏みながら、談笑
の間に、天下の大事を決した英傑であるが、自らその
膽力を、禪學と劍術とに依つて養成したものと信じ
て、左の如く語つて居る。

「自分は、殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを修業した
が、徳川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に
一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。
度々、刺客かなんかに脅されたが、何時も手取にし
た。この勇氣と膽力とは、畢竟この二つに養はれ
たのだ。危険に際會して、逃げられぬ場合には、ま
づ身命を捨ててかゝつた。さうして、不思議にも
死ななかつた。こゝに精神上の一大作用が存す
るのだ。急に勝たうとすると、忽ち頭熱し、胸跳り、
措置顛倒し、進退、度を失するやうな患が生ずる。

又遁げて防禦の位置に立たうとすると、忽ち畏縮の氣が生じて、相手に乗ぜられる。大小の事、皆この規則に支配せられるのだ。自分はこれら精神上の作用を悟つて、何時もまづ勝敗の念を度外に措いて、虚心坦懷で事變に處した。それで、小にしては刺客亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して、綽々餘裕あることが出來た。」

と。海舟は主として、劍術と禪學とで、膽力を鍊磨したのである。理窟の上から、膽力を養成することは容易でないが、實地の修行において、膽力の鍊磨せら

れることは、殆ど人の想像以上である。(青年修養訓)

一〇 極地の探検その一 新保 磐 次

極地探検、これ近來の一大問題なり。遠く本源を尋ぬるに、極地の探検は最初營利的より起りて、後に學術的となれるなり。大昔の事は暫くおき、我が戰國時代の前より、葡萄牙人は亞非利加の南端なる喜望峰を廻りて、東洋に出づる航路を發見し、盛に印度と交易せり。されば航海を以て誇とせる英國人は、一層便利なる近路を求めて、かれらに鼻あかせんとて、

葡萄牙人は
云々
西紀一四九八
年葡人 Vasco
da Gama 喜
望峰を廻りて
印度に達す。

さてこそ極地の航海に力を用ひそめたるなれ。げに地球儀にて見る時は、歐羅巴より東洋に至らんには、喜望峰を廻らんより、直ちに北氷洋をつきぬくる方、遙かに航路短ければなり。その他、鯨は北海に多く住むといふ中に、何れの邊に最も多く住むかを探検するも、亦營利目的の一なりき。已にして、北極航路の困難にして、實用に適せざるを知るに及び、目的は學術的となり、専ら氣象、磁石力、陸地の分布、動植物等の調査をなすに至りぬ。

極地とは南北ともに極圏以内の地をいふ。北極圏

は北極點より半徑約八百里を以て描ける圓内にし、我が占守島より此圓の圓周に達するには、最近距離約五百里あり。占守の嚴寒、交通の不便、食料の不自由等は我等の常に聞くとくころなり。まして極地のことなれば、風雪の險惡なる、固より筆舌のよく及ぶ所に非ざるべし。無數の大氷塊は海を蔽ひて流れ來る。熟練なる船員は右に避け左に逃れ、務めて衝突を防ぐといへども、時として氷塊に挟まるゝときは、船は大抵押しつぶさるゝを免れず。一日の行程僅かに一哩餘に過ぎざることあり。或は氷雪に

John Franklin

英國の北極探検家。

閉ぢられて、進退こゝに谷り、氷の中に穴を掘りて、その内に數月を送ること少からず。かゝる間に、限りある食料は盡き、或は久しく果物野菜を取らざるため、壞血病にかゝり、一隊の勇士枕を並べて氷海孤島の中に死することあり。有名なるフランクリン探検隊の全滅も亦かくありしなり。最近に丁抹人ブレンドンが飢寒の爲に死せし時、最後の日記は左の如く記しありき。

「余は北緯七十九度に於て、次第に缺けゆく月の下に死す。余が足は凍り、四邊は暗し。行くこと能

Crimean War(1853—1856)

英・佛・土の聯合軍と露との戦争。

はず。二友の屍はこの灣の中央にあり。」

學術のため、國家の名譽のためとはいひながら、何ぞそれ最期の悲惨なるや。

かのフランクリン探検隊の全滅は、遠征史中の一大悲劇なりき。英國は續々と搜索隊を派遣し、八年の後、初めて彼等が一島に餓死せりといふ消息を得たり。然るに當時英國はクリミア戦争に忙しく、直ちに遺跡を弔する船を出さざりければ、フランクリン夫人は奮然として私費を抛ち、且友人の助を得て一の搜索隊を發遣し、良人一行の遺骨及び遺物を收め

Nordenskjold
Nansen
Peary

たり。この事件の搜索隊前後四十有九、費用一千萬圓に及べりといふ。かゝる困難の中に非常の大功を立て、世界の賞讃を博せし豪傑亦少からず。いでその二三を紹介せん。第一は^{*}ノルデンシヨールド、第二はナンセン^{*}博士、第三は讀者の耳に最も新なるペアリー大佐なり。ノルデンシヨールドは鑛物學者にして、瑞典國より派遣したる探檢家なり。彼はフランクリンの航路に反し、亞細亞の北を通過して東洋に出でんとせり。途中氷に鎖されて、そこに越年せしかど、その間種々

Bering

學術上の觀測をなし、遂に亞細亞の東なるベ^{*}ーリング海峡を経て東洋に出で、其の使命を果しぬ。歸途我が國にも立寄りて、盛なる歓迎を受けしは明治十三年のことなりき。嘗て徳川三代將軍の時、英國の探檢家は、國王より我が日本に寄せらるゝ書を奉じて、同じ航路に就きしが、志を得ずして途中より歸りき。かくて此の航路全部を通過せし者は、古今唯ノルデンシヨールドあるのみ。

一一 極地の探檢 その二

Greenland

ナンセン博士は諾威の動物學者なり。ペアリー大佐はもと米國の土木技師なりき。北亞米利加の東北にグリ^{*}ンランドといふ一大陸地ありて、大部分極圏の中にあり。この陸地は嶋なりや、或は北極まで續ける大陸なりや、またその内部は如何なる有様なるか、近頃までは全く世に知られざりき。明治二十一年、ナンセン博士はこの陸地の東岸より西岸に向つて横斷し、内部は一帶の氷高原にして、人の住居に適せざるを報告せり。ついでペアリー大佐はこの陸地の北部を横斷せり。

彼は高原の北端より東岸に達し、海拔四千尺の氷の崖の上に立ち、四方をきつと見渡すに、洶涌たる氷海は東より北に周りて、此の陸の北極に接せざることを見せり。その時の心地いかに雄快なりしぞや。ペアリー夫人はこの遠征に同伴して、途中良人の病を看護し、遂に偉功を成さしめたり。夫人は又妊娠の身を以て、良人再度の遠征に隨伴し、船中にて玉の如き女兒をまうけたり。この女兒は最北に生れたる文明人として、世界に一種の名譽を得たり。かくて後、ナンセン博士は、流水が北極點附近を通過

すべき徑路を考へ、之を利用して北極に至らんと期せり。明治二十六年、彼は堅牢なる一種の船を造り、古來探檢家の大敵とせる流氷に乗じて、極海に漂流すること凡そ一年半、流氷が稍北極に遠ざからんとするを見るや、決然として船を捨て、上陸し、橇によりて北極に向ひぬ。彼はいかにして再び歸るべき、大膽といふも餘りありといふべし。彼は、行けども行けども高低、凹凸の氷原にして、恰も滄海の大浪がその儘凍りつきたらんやうなるを見て、只荷物の積卸しに年を重ぬべきを念ひ、慨然として歸途に就き

Jackson

ぬ。かくて或時は流氷に乗り、或時は革船に乗り、千辛萬苦の後、とある島に着き、料らず英國の探檢家ジャクソンに逢ひ、其の小屋に伴なはれて温き待遇を受けたり。ジャクソンが日記にかく記せり。

「小屋にて湯と石鹼とを與へて身體を洗はしめしに、三年の垢と脂肪とは容易に落ちず、數回ナイフにてこそげ落して、少しく清潔になりたり。」

其の勞苦、想ふべきにあらずや。ナンセン博士遂に歸國して、大探檢家の名譽を得たり。

一方にはペアリー大佐亦北極點を志し、遠征數回、そ

Cook

の間兩足凍傷して、八本の指を切斷するに至れり。不屈不撓なるペアリーは、明治四十二年四月六日を以て遂に北極に達し、こゝに米國の國旗を立てたり。この時最低溫度華氏零下三十三度、蓋し北極は極地の最寒點に非ざるなり。これより先、米國の博士クック*亦北極

北極點に樹立せし旗



Penguin

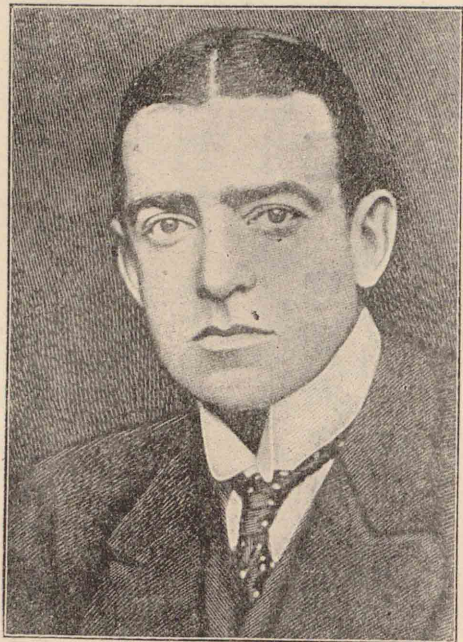
に達したりと稱す。されど世間は未だ之を信ぜず。南極圏内の探檢はさのみ久しからぬ事にて、明治より凡そ百年ばかり前に始めり。これには航路發見の目的を含まず。ただ捕鯨家の副事業と純粹なる學術的觀測とに基づけり。近代の事なればにや、悲惨なる遭難の事實は北極探檢の如く多からざれど、暴風雪は南極の一名物にして、其の他内地凹凸の多き等、探檢を困難にする事情少からず。この中にありて能く探檢家を歓迎し、遠征の勞苦を忘れしむる氣樂者あり、名をペンギン鳥といふ。この鳥身長四

Shackleton
Scott

尺許り、翼短く、兩足を以て直立して雪中を歩むさま、頗る人間に似たり。各群中に王あり。一群皆王の後に随つて列を成し、人間の來るに逢へば、歩を止め首を屈して敬禮し、それより人語の如き調子を以て長々と呟くこと、あたかも歡迎演説をするが如しといふ。

南極探検家の中にて、最も著しき功を收めたるは近時の英人シヤツクルトン大尉と同スコット大佐となり。大尉は明治四十二年南極を距ること僅かに五十里の點に達せしが、食料盡きて引返しぬ。四十

白瀬中尉
名は轟。



ントルクツヤシ

三年スコット大佐更に探検の途に上り、必ず南極に至らんことを期す。英國皇后陛下は爲に國旗を親授し給へり。

こゝに吾が國に白瀬輜重兵中尉あり。早くより極地探検の志を抱き、身を寒地の氷雪にならし

つゝありしに、さきにはペアリー大佐の成功を聞き、今又スコット大佐の大志を聞きて、中尉は雄心勃々

禁じ難く、勿々遠征の途に上りき。その結果は未だ十分ならずと雖も、完全の準備と忍耐とを以てこの志を繼ぎ、更に學術的探檢を行ふ者あらば、終に終局の目的を達し得るに庶幾からんか。

一一 膠洲灣より兩親に送る

小岩 義雄

御書面確かに拜見仕候。何がさて御察しの通り、外に心を慰むる物も無き戰地の事とて、郵便程嬉しき

ものは無之、毎日葉書一枚宛にても見度候へども、船の所在によりてはさうも參らず、そのみ物足りぬ心地致居申候。

度々の御心添、身に浸みて有難く、さなきだに鐵石の覺悟仕候身、益奮勵仕り、ふかく自重して活躍の氣を養ひ居候。陸も海も同じく武器の進歩により、戰爭もなかく、面白く演ぜられ申候。

或は雲の上に敵味方しのぎを削るかと思へば、又水の中に刃を交ふる活動寫眞の活光景、蓋し何萬圓の木戸錢を出しても、見られぬ人には見られぬ面白さ

に有之候。

身體健かにして、榮ある征獨の役に従ふ吾が身、誠に幸福と申す外無之、些々たる困苦、缺乏は此の大なる幸福に對すれば、物の數にも候はず、御兩親様にも此の大幸福共々に御悦び被下度候。幸に凱旋御面謁の折は、萬事詳細に御話申上げ、今敵の心膽を寒からしむるが如くに、皆々様の御心を寒からしめんなど、樂しみ居候。

戰時故日々定まりたる日課等を行ふ事も出來ず、轉變限りなき行動を致居候。時に砲煙彈雨と迄は行

文・敬止
妹と弟の
名。

かずとも、殷々たる砲聲を聞き、閃電の如き砲火を見ながら艦匣を左右しては、天晴れ海上の王に相成候ごとく力み返り、或時は波靜かに月冴ゆる青海原の世界に身を置き、月と故郷を語りては只の義雄となりて、文^{*}や敬止の聲をも聞き、御兩親の御姿をも拜しまつる氣に相成り、又二三時間もまどろむかと思へば、忽ちにして、決死隊に参加、夜陰に乗じて敵の本營を突き、青島市街を火の街と化せしめたり。と思ふ間もなく、何時しか自分は澁谷の家に歸りて、文や敬止と共に遊び戯れ、文がピアノを嬉しさうに弾いて居

ると思ふ折柄、忽然小岩機關少尉殿、七時であります。と、番兵の大聲に楽しい夢を破られて目を覺せば、矢張り身は艦中の人。「そらもう交代だ水雷防禦だ。」となか／＼ゆつくり眠る暇も無之候。併し此の頃は去月頃に比すれば、よほど吞氣に相なり申候。凱旋の日も近きにある可くと存候間、樂しみにして御待ち下され度候。草々。

十月三日

大正三年

十月三日*

義雄

御兩親様

一三 青島入城式 その一

黃海に南面して青島政廳が巍然として聳えてゐる。一條の大道は廳の階から直ちに海岸に達し、其の正面に小さい島がある。元來此の島が青島の名の持主で、此の島ゆゑに此の灣が青島灣と呼ばれてゐたのであつた。併し今は陸の方が青島と爲つて、小島の名はアルコナと換つて了つた。

政廳の屋頂には今、日章旗が翻つてゐる。黃海を、否アルコナ島を背にし、此の日章旗と相對して神尾將軍は馬を立てゝゐる。山梨參謀長以下幕僚は其の

神尾將軍
名は光臣
山梨參謀長
名は半造

若見將軍
名は虎治。

Prinz Heinrich

左翼に馬首を駢べ、右翼に少し離れて侍從武官若見將軍が手綱を控へ、其の右に文官、次に從軍記者及び僧侶が整列してゐる。此の前を東西に走る大路をプリンツハインリヒ街といふ。此の地點こそ眞に青島の心臓とも謂ふべき樞區で、東京ならば馬場先門外と日本橋通を兼ねたやうな所である。

時は大正三年十一月十六日午前十時、獨逸皇帝が好口實を見出して、此の青島を強奪してより十八年目の、而も同じ月である。今しも我等が整列してゐる此の海岸に上陸して、獨逸艦隊司令長官は支那の守

備隊長に對し、三時間以内に退去を要求したのであつた。一兵に舛らずして占領を全うし、やがて山東省支那東洋に於ける優越なる勢力の根據を作つた。此の獨逸帝國に取つて極めて目出度い誇るべき地點に於て、神尾將軍は攻圍軍の分列式を行はんとするるのである。

三々伍々、殘留の獨逸人達は路傍に佇んで日本軍の分列式を觀ようと待つてゐる。戦争の開始以來青島の男といふ男は、殆ど總べて兵器を執つて守備に加り、そして概ねいまは俘虜となつて了つた筈、現在

青島に残つてゐる獨逸人は、婦人と小兒とが多いのである。今日の見物に、無心を子供が嬉々として笑つてゐる。待ちあぐんでは騒ぎまはつてゐる。此の幾月、恐ろしく寂しかつた街に俄かに多くの人が入つて來るのだから、子供達には疑もなく嬉しいこととに違ひない。母や姉や老人達は聲を密めて叱つてゐるのもある。或は賤しい商人などであらう、咬へ煙草で餘所事の様におらく、歩く奴もある。窓の内、屋根の上などから眺めてゐる者もある。獨逸人の中には支那人も雜つてゐるが、此の廣い街、繁華

Pompeii

ベスビオ火山の噴火によつて、灰の下に埋められ、後に掘出された町。

の中心たる大通に見渡したところ見物人の總べてが百人とは無い。兩側の大夏高樓皆戸が鎖されてある。予は^ポンペイの町、地の底から掘出された死の町に立つてゐる様な氣もした。併しそれは予が獨逸勢力の消長といふ様な事を考へるからであらう。目の當り見える所の青島はむしろ陽氣に裝飾されてある。屋根は概ね赤勝な瓦に掩はれ、壁は黄色、柿色、白色が多い。蔦葛が裝飾的に扉にも這はせてある。其が今丁度朱を濺いだやうである。山々は十八年來の努力空しからず、松も

稍長じて山骨を隠すまでになつた。其の他、落葉松、栗、櫟、橡、檜、銀杏、荆、花、楓の類も皆能く育つてゐる。此の頃の砲火の中にも既に幾度か霜が降つたであらう、遠く近く、浅く濃く、彩られてゐる。利口な獨逸人は祖國の爲に死を吝んで、命大事と脆くも降伏して了つたが、山も野も街も血を塗つた様な青島の初冬は、紅葉の勝區として日本にも獲易からぬ眺である。況や青島半島は對岸の海西半島と相對し、幾個の島嶼、其の間に點々として山の姿凡ならず、汀の沙きよらかにして、風光の明媚なるは、他に類を求め難

い。一言に評し去れば、青島は別莊地の光景である、商港とか首府とかいふ趣は甚だ乏しい。

一四 青島入城式 その二

遠く喇叭の音が起つた。待構へた人々の氣が一時に引締る。軍馬も皆勇むのだらう、神尾將軍以下、綱を控へる、山梨參謀長の馬が頻に尾を振る、其の隣の某參謀の爪白の馬が小招ぎするやうに前脚を揺かす。朝から曇つて、一時は少し降つた空ががらりと晴れ

Propeller

十年前
明治三十八
年。

堀内少將
名は文次郎。
大村旅團
歩兵第二十三
旅團、司令部
は長崎縣東彼
杵郡西大村に
在り。

て、市街が麗らかに照輝く。喇叭が漸次近くなる、蹄の音が憂々と響く。其の時先頭の一將校がかけた凛乎たる號令が、今まで緊縮してゐた寂寞を破る。折からプロペラの音高く頭上の空に飛行機が翔つて來た。嗚呼、飛行機の入城式、思へば時代は急速な進歩をした。嘗て十年前旅順開城の折には夢にも想はなかつた事である。先頭について喇叭手の一隊が通過し、其の後に乗馬の將校が數騎續いて現れた、堀内少將が大村旅團を率ゐて來たのである。歩武肅々、師團長の前を通

師團長
第十八師團長
神尾光臣。



入城式の一部分

過するや、驀然馬首を廻して師團長の右に出で、刀禮を施して報告をする。其の颯爽たる英姿を見ては、男兒うまれて一旅の將とならば、また以て瞑す可しといふ感が起つた。まして今日此の處にして、東亞の歴史に永へに存すべき此の光輝ある入城式を行



印度兵の入城

ひ、幾萬貌貅の敬禮を受くる神尾將軍の榮譽に至つては、人生の快事こゝに極ると謂つてよい。當事者は傍觀者より却つて無頓着なこともある。此の時神尾中將はどんな感想を懷いてゐられるであらう、表情の乏しい顔は、遠目には一層落漠として白い鬚

のみが日に輝いてゐる。騎つたるは逞しい赤栗毛、二白で流星なのが著しく眼に着く。出ようくとするのを、將軍は悠然として手綱を絞りつゝ、視線はいつも同じ路上に在る。

英國兵の行進は多大の興味を以て迎へられた。英語の號令は耳に珍しく、左の肩に銃を擔いでゐるのは眼に珍しかつた。脚の長い將校が脚の短い支那馬に騎つてゐるのは、少しく威嚴を損した。異彩を放つたのは其の中の印度兵であつた。頭には國俗に隨つて丈餘の布帛を捲いてゐる。赭黒い顔の大

部分が漆黒な鬚に蔽はれて凄じい。亞弗利加種の黒人とは違ひ、歐羅巴人と同祖だから、骨格・相貌は十分の威容を備へ、身長は英人より高い。如何にも倔強に見える。

動作の器械的に整齊して見られるのは、天下獨逸兵に過ぐるものは有るまい。此の點に於て日本軍と雖も一步を譲る、其の意氣の充實してゐるのは、我が軍を以て第一に置くことができよう。特に今日の分列式に於て予は然り感じた。

破れた軍旗の過ぐるとき、余は脱帽しながら何とな

く感に迫つて、きまりが悪いほどほろ／＼と涙を流した。其の次に通つた新しい軍旗に敬禮する時も、やはり泣かずにはゐられなかつた。或時は又、行進する兵士の、力みかへつて、閱兵官に一所懸命注視の禮をしながら通過するのにも、潜然として堪へられなくなつた。予は自己の感情的なことを愧ぢながら、後に他の人と此の事を語り合つて見ると、案外に同じ衝動を受けて落涙したものが少くなかつた。

(澁川玄耳「小敵大敵」による)

比叡山
京都東北の
山。山上に天
台宗總本山延
曆寺あり。

一五 比叡山上の眺望

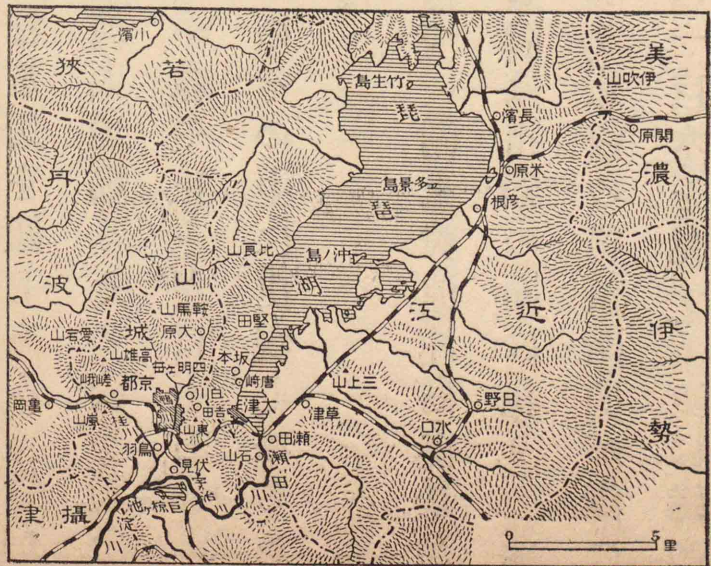
往年の秋、比叡^{*}山に登りて、その大學寮に宿す。時に
夜氣漸く寒うして、夢まどかなること能はず。拂曉、
起つて窓を開けば、夜來の密雲いつしか全く晴れて、
殘月淡く天空に在り。東谿の老杉皆月を浴びて、光
水の如し。秋風の蕭颯たるを聞きつゝ、坐して天の
明くるを待つ。月益淡く、東漸く白し。
昨日、杉と杉との間、雲霧深く罩めたるもの、今朝明け
來れば、彼方に村落を現じ、此方に田圃を生じ、乍ちに
して森出で、乍ちにして丘來り、近くは堅田の里、遠く

は三上の山、刻一刻その藏むる所を顯し來る。やが
て旭光輝々、ある限りの山河大地、盡くその姿を現じ
了れば、こゝに、その村や川や森や丘を左にし、右にし、
前にし、後にして、一大湖水のその中に出現し來るを
觀る。壯觀いふべからず。

朝食を終へて大學寮を出づ。湖光爽涼、沖島・多景島・
竹生島を數ふべく、堅田・唐崎は指顧の間に在り。漸
く行いて道を雲母阪に取り、比叡の絶頂四明が嶽に
登る。雲母阪より登るに一巨木を見ず。更に進め
ば、矮小なる灌木もなく、到る所唯小篠の生ひ繁れる

を見るのみ。峨々たる峻阪を攀ぢて、遂に最高峯に達す。この邊より京都を下瞰するに、市街の隈々まで指點することを得。眸を北に轉ずれば、小比叡を隔て、遙かに大原の里山谷の間に潜めるを見る。凡そ四明の勝は江城二州に跨り、超然として群山を抜き、東の方琵琶の大湖と

江城二州
近江山城



西の方京攝の平野とを一眸に集め得べき所に在り。水を見れば、琵琶湖の胸腹は堅田・唐崎に至り、狹まりて轉手となり、更に瀬田・石山の邊より瀬田川となりて、一たび連山の間に隠れ、潜み流るゝこと幾里にして、更に遙かなる後方の山麓より宇治川となりて流れ行く。而して鴨・桂の二川は東西より洛中を抱きて流れ、末遂に宇治川に合して淀川となり、白蛇の蜿蜒として走るが如く、平野の間を縫ひて、遙かに攝津に下り行く。山を見れば、湖邊の峻峯、比良山より竹生島・多景島・沖島に下り、遠くは伊吹山、近くは三上山

Panorama

となり、瀬田川の南岸に沿ひて、連山重疊、山城に入り、また小比叡より大原の里を経て鞍馬・高尾となり、高きは愛宕の山、低きは嵯峨の峽、その末漸く陵夷して、西山一帯は河攝二州の方に消行く。而して湖畔に於ては、堅田・阪本・唐崎・大津など手に取る如く、瀬田の長橋に汽車の煙を揚げて走るを見、山西に於ては、白川・吉田・上京・下京・鳥羽・伏見・巨椋池（クワシイ）など、淡靄中に旭光にきらめき渡るを見る。山を繞りて宛然たる一大パノラマなり。恍として自ら覺えず、起つて長嘯すれば、聲は脚底の白雲を越えて、遠く江城・河攝の野に

傳はる。（杉村廣太郎「へちまのかは」による）

一六 二宮翁夜話

翁曰く、百人一首に、「秋の田のかりほの菴のとまをあらみ、我が衣手は露にぬれつ」とあり。此の御製を歌人の講ずるを聞けば、只言葉だけにして深き意もなきが如し。何事も己が心だけならでは、解せぬ物なればなるべし。夫、春夏は百種・百草、芽を出し生ひ育ち、枝葉繁り榮え、百花咲満ち、秋冬に至れば、葉落ち實熟して、百種・百草みな枯る、則ち植物の終なり。凡

そ事の終は、奢る者は亡び、悪人は災に逢ひ、盜は刑せらる。此の御製、一生の業果の應報を、草木の熟する秋の田に寄せさせられしものなるべし。苦をあらみとは、政事あらくして行届かざるを歎かせ給ふなり、御慈悲御憐みの深き、言外にあらはれたり。此の者は何々に依つて、獄門に行ふ者なり、我が衣手は露にぬれつゝ。此の者は火炙りに行ふ者なり、我が衣手は露にぬれつゝ。誰は家事不取締に付蟄居申付く、我が衣手は露にぬれつゝ。悪事をして刑せらるゝ者も、政事の届かぬ故、奢に長じて滅亡する者も、我

物井
下野芳賀郡に
ある村。

が教の届かぬ故と、御憐みの御泪にて御袖を絞らせ給ふと云ふ歌なり。感銘すべし。

予始めて野州物井*に至り、村落を巡回す。人民離散して、只家のみ残り、或は立腐れとなり、礎のみ残り、屋敷のみ残り、井戸のみ残り、實に哀れはかなき有様を見たる事ありき。あはれ、此の家に老人も有りつるなるべし、婦女兒孫もありしなるべきに、今此の如く萱葎生ひ茂り、狐狸の住處と變じたりと思へば、實に我が衣手は露にぬれつゝの御製も思ひ合せられて、予も袖を絞りしなり。京極*黄門、百首の巻頭に、此の

京極黄門
藤原定家。

御製を載せられて、今諸人の知る所となれるは、悦ばしき事なり。感拜すべし。

庭訓往來
手紙文にて日常の智識を授けんとして作れる書。
徳川時代には寺子屋の教科書なりき。

翁いはく、庭訓往來に、注文に載せられずといへども、進じ申す處なり。と書けるは、能く人情を盡せる文なり。百事斯くの如く有りたきものなり。「馳馬に鞭打ちて出る田植かな。」馳馬は注文なり、注文に載せられずといへども、鞭打つ處なり。「影膳に蠅追ふ妻のみさを哉。」影膳は注文の内なり、注文になしといへども、蠅追ふ處なり。進みて忠を盡すは注文なり、退いて過を補ふは、注文に載せられずといへども、勤

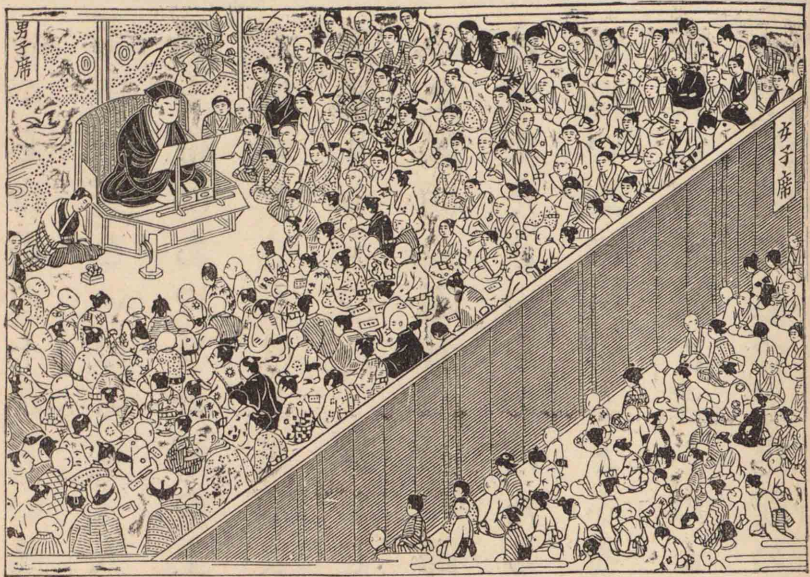
幾く諫む
論語里仁篇に「子曰、事父母幾諫、見志不從、又敬而不違、勞而不怨。」とあり。
敬して云々前註を見よ。

むる處なり。「幾く諫む」までは注文の内なり、「敬して違はず、勞して怨みず」は、注文に載せられずといへども、盡す處なり。菊花を贈るは注文なり、注文になしといへども、根を付け進ずる處なり。凡そ事斯くの如くせば、志の貫かざる、事の成らざることあるべからず。是に至つて誠忠の至極は神明に通じ、西より東より南より北より、思ふとして服せざる事なしと云ふに至るなり。(福住正兄「二宮翁夜話」)

一七 己をかへり見よ

柴田 鳩翁

或山家より京の町へ談義僧を招待に参りました。折ふし其の日は雨ふりて道も悪いので、駕籠をもつてむかひに來ました。和尚もやがて用意して駕籠にうちのり、京をはなれて三四里ばかりと思ふ所で、どうした事か駕籠の底がぬけました。いたはしや、和尚は袈裟も衣もどろまぶれになられた。迎の人足も氣のどくがり、そこらかけまはつて繩ぎれ多くひろひきたつて、やうくと駕籠をからげ、扱和尚に「ふたゝび御乗りなされ」といふ。和尚も氣味わるけれど、雨はつよし、袈裟衣はよごれる、晝中にあるくも



心學道話の席

外聞悪く、ふしやうくに駕籠にのるとき、「これ、かごの衆、もう底はぬけはすまいか。」いえく、氣づかひはござりませぬ。」といふ。乗移る、昇上げるの拍子で、又底がめきめきいふ。和尚大きに肝を潰し、これでは中々安心がならぬ。御苦勞

ながら、合羽の上からいま一度丈夫に繩がらみにして下され」といはるゝ。人足も尤もに思ひ、また繩ぎれを拾ひあつめ、合羽の上を豎横十文字にからげ、是ではあやまちはござるまいと道をいそいである村を通りかゝつた。折ふし此の村に法談があつたのみえ、參詣の老若、道場の歸りあしに此の駕籠を見付けて、かたぎぬをかけたる親仁が、かたはらのうばかかにいふには、「なんとみな衆、今日の御勸化はありがたい事ではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離のことわり、何どき如來様の

おむかへがあらうやらしれぬが人の身の上、あれあの駕籠を見さつしやれ。どうしても京へ奉公に往つた人が死んだと見えて、死骸を在所へつれていぬると見える。扱もはかないものぢやござらぬか」といふ聲を、かごに乗りたる和尚が聞きつけ、さては我を死人と心得たか、いまくしいと、わざとかごの中で咳ばらひすると、かの老人は此のせき拂におどろき、急にかたはらへ飛びのき、小聲に成つて、「死人ぢやと思ふたらどうでも科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ」といふ。和尚いよく腹をたて、今はた

まりかねてかごの中でじだんだふみ、大聲あげて、科人ではをりない」といふ。其の聲に又びつくりして、「さては科人ではなうて、どりでも氣違ぢやさうな」といはれた。是が面白いはなしぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたものの故、誰にみせても死人ぢや。然るに中から物いへば、科人といふもことわり、又氣ちがひぢやさうなといふのも、外からこじつけていふのではない。皆此の方に其のすがたの模様があらによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。よいものをわるいとは人はいはぬ。何事もかへり

みるのが肝心ぢや。ある人の道歌に、

世の中は何もいはずにいよすだれ

其のよしあしは人に見えすく

(鳩翁道話)

一八 三種の生活

和田垣謙三

生活に三種の別あり。蟻のそれ、蜘蛛のそれ、蜂のそれは是なり。蟻は孜孜汲々餌を漁りて寧日なし。其の奮闘努力は實に勤勉の模範たり。又夏期に働きて、冬營の爲に貯蓄するが如き、其の先見遠慮は貯蓄心の模範た

り。これ蟻の美德として詩歌に詠ぜられ、文章に謳はれ、此の點に於て人に師たるの價值ありとさへ稱揚せらる。然れども其の勤勉は何が爲の勤勉なるか、其の貯蓄は何が爲の貯蓄なるか、要するに唯自己の爲に外ならず。是に依つて之を見れば、彼はもと利己主義の動物なり。個人本位の生涯を送るものに過ぎざるなり。予曾て「義も虫がつけば砂糖を嘗めたがり」の一句を物したることあり。臭い物には蠅がたかり、甘い物には蟻が集る。而してこれ豈獨り蟲類のみならんや。

々々疎而不漏
老子に、「天網恢恢疎而不漏」とあり。普通には「不失」を「不漏」とす。

蜘蛛の生涯は如何。彼の技巧は精妙にして、所謂「恢々疎而不漏」の羅網を張り、専ら空中を自由に徘徊する小蟲を虜とするを能事とす。巧は即ち巧なり、智は即ち智なり。然れども是やがて追剝的、強盜的、犯罪行爲ならずや。抑、人は社交的動物なり。自他相助け彼此相倚り、共同一致以て相互の利福を計らざるべからず。然るに今の世、他人を倒して自ら起ち、弱者の肉を啖うて而して己が口腹の慾を逞しうする如き者すくなからず。これ寧ろ蜘蛛に近き醜類なり。

蜂特に蜜蜂の一生は如何。終日千紫萬紅の間に飛來り飛去り、一見利を追うて日も猶足らざるが如しと雖も、これ畢竟吾人の爲に美味にして且滋養に富める蜂蜜を製造せんが爲なり。彼は身死して後も、尙此の有益なる遺産を人類に附與するものなり。夫の「野に呼べる人の聲なり。」と叫びて、ヨルダン河畔に彷徨ひしヨハネの如きも、之によりて命を繋ぎしにあらずや。文官錢を愛し、武將亦命を惜しみ錢を愛する世の中に、獨り彼の生涯は犠牲的、獻身的、貢獻的、又殺身成仁的なり。實にや虎は死して皮を残し、

蜂は死して蜜を遺す。人にして天下後世の爲に偉勳を垂れ、芳名汗青を照すに非ずんば、蜂に對して何の顔色かこれあらん。〔吐雲錄〕

一九 越路の雪 その一

延元元年十月十日は、いかなる日ぞ。昨日まで水魚の思をなしたる君臣父子、萬里に隔り、兄弟夫妻、十方に別れぬ。主上は、直義＊に迎へられて、京都にかへり給ひぬ。東宮は、義貞＊におくられて、北國におちたまひぬ。折しも、降りしきる大雪に、北國路はことには

主上
後醍醐天皇。
直義
尊氏の弟。
東宮
恒良親王。

木目峠 越前、南條郡と敦賀郡との界にある山。
 氣比氏治 敦賀町なる氣比神宮の大宮司。
 金崎城 越前國敦賀郡。
 柚山 越前國南條郡。
 足利高經 尊氏の同族にして越前の守護たり。
 花山院 清和帝の皇子貞保親王の邸なりしが、後に藤原氏傳領す。
 延曆寺 比叡山上の寺。

げしく、木目峠にかゝりたまふころは、一寸だにも進みえず。弓矢を焼きて煖を取り、人々相懷きて温を取り、辛うじて敦賀に至る。氣比氏治迎へて、金崎城に入る。義貞、長子義顯を越後に、弟義助を柚山に遣して、諸國の兵を招く。足利高經、二萬餘人を以て金崎を圍む。義貞打ちて之を走らす。是より賊兵日におとろへ、官軍日々に盛なり。天皇は、一たび京都にかへり入らせたまへども、高氏いかでか真心より仕へまつらん。即ち花山院に押込め奉りぬ。今は延曆寺のむかし戀しくおぼした

まへども、せんかたなくて暮したまひしに、北國の軍の模様をほのかにきこしめして、ある夜竊かにこの院をのがれ出でて、吉野にみゆきしたまひぬ。さて使を義貞がもとに遣して、賊徒誅伐の詔書を下し賜はる。義貞感憤して愈務む。先の還幸の事、今やいかばかり悔しくおぼしたまふらん。賊軍再び勢をつくして金崎を攻む。義貞拒ぎ戦へども勝たず。太子は虜にせられ給ひ、義顯は自殺しぬ。義貞走りて柚山に據る。高經また來り攻む。義貞、義助と共に之を撃ち、追ひて越前府に入る。高

足羽 今の福井市の南部なるべしといふ。
 黒丸城 越前吉田郡西藤島村。
 北畠顯家 源親房の長子。
 新田義興 義貞の子。
 男山 山城八幡町にあり。

平泉寺 越前大野郡に在りし寺。

經走りて足羽を保ち黒丸城に據る。官軍の勢大に振ふ。義貞一舉して、高經を滅さんとす。時に北畠顯家・新田義興等男山によりて賊に圍まれたり。天皇之を憂へ、宸筆の勅書を義貞に下して、早く京都の賊を平ぐべきよしを諭したまふ。義貞感泣して、古より源平二氏、代々大功ありといへども、宸筆の勅書を下したまひしを聞かず。當家の面目、この上あるべからずと。やがて打上らんとせしに、高經の後患をなさんことを慮り、先づ黒丸城を圍む。高經恐れ、大に守備を修めて、七營を設く。時に平泉寺の僧も

藤島 越前國吉田郡。

三國 支那歴史中に魏・吳・蜀の三國が並立したる時代。
 臥龍 蜀國の名臣諸葛亮の事。

叛きて、藤島に陣す。ある夜、義貞夢に、高經と足羽に戦ひしが、身みづから長蛇となりしに、高經おどろきて、逃げ奔れりと見て、さめぬ。義貞よろこびて、士卒を會して、之を語りきかす。いづれも大吉なりといふ。獨り齋藤道獻うけがはず。心にかゝることなりといふ。これ當時三國の如きさまあるに、臥龍死して、蜀亡びぬる例あればなり。

二〇 越路の雪 その二

七月二日
延元三年（二
九九八）

燈明寺
越前吉田郡中
藤島村に在り
し寺。

閏七月二日、義貞赤地の錦の直垂に、脇立ばかりにて、諸將を庭上にめして、戦畧をさとし、さて鎧の上帯しめさせて、水練栗毛といふ馬に乗らんとせしに、いかにしたりけん、馬俄かにをどりて、舍人ども殆ど死なんとす。また足羽河を渡る時、再びおどろきたれば、旗水上にたふれぬ。衆皆凶兆なりといふ。義貞燈明寺に陣し、兵を分ちて攻立つ。藤島の僧兵強くして、官軍ためらふ様あり。義貞これを見て、大いに怒り、馬に乗替へ、鎧着かへて、畔路傳ひに馳せよる。相従ふ兵五十騎ばかり、高經歩卒三百をして藤島を救

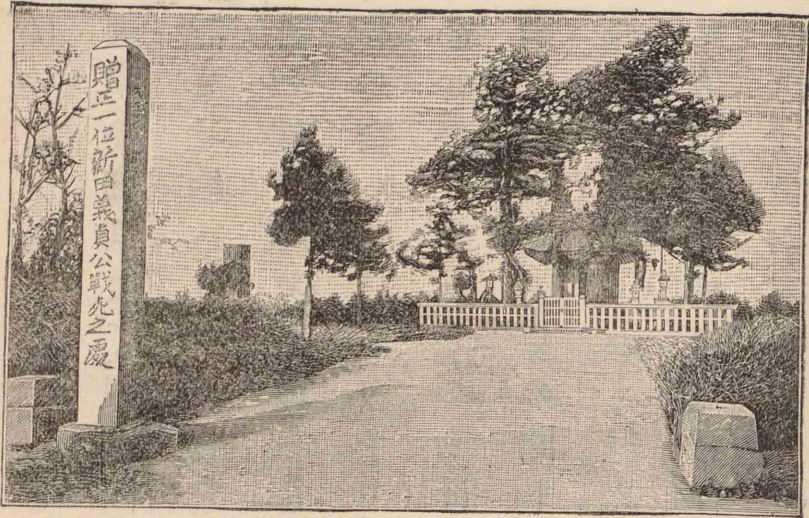
千鈞の弩は
云々
三國魏志に
「千鈞之弩、不
爲三鼯鼠一發也
機。」

はしめんとす。義貞道にこれに逢ふ。敵楯をかまへて亂射す。我が兵楯なし、身を以て義貞を蔽ふ。中野宗昌、義貞に目くばせして、千鈞の弩は鼯鼠の爲に發せずといふ。義貞聞きも敢へず、士を失ひて獨り免るゝは我が意にあらずと、馬に鞭ちて馳出でけるが、名を得し駿馬とて、一二丈の堀をとびこえとびこえ行きしかども、五筋まで矢を負ひて、遂に屏風を倒すが如く、岸の下に轆び落ちぬ。義貞弓手の足を敷かれて、起上らんとせられしに、白羽の矢ありて眉間に中る。急所の痛手に、目くれ心迷ひて、今はこれ

河合
越前國吉田郡

までなりと、抜きたる太刀を、左の手に取直し、首かき切りて、深泥の中に陥り給ふ。時に年三十八、相従ひしもの、腹かき切りて同じ枕に死す。折柄小雨打ちしきりて、霧さへ立ちおほひたれば、一人の赴き救ふものなく、日暮るゝころ、數騎河合にかへるものあるを見て、皆義貞とおもへりしなり。

初め敵入氏家重國、義貞の死せる時に、その首をもて營にかへり、高經の前に詣りて、「我こそ新田殿の一族とも覺ゆるものゝ首うちたれ。兵どもの殉死せしさま、馬物具のやう、葉武者とはおぼえず。これ死人



新田義貞戦死の地

の膚にかけし守囊にて候。』とて、血をも洗はぬ首に土のつきたる金襴の囊をそへて出しぬ。高經つくづくと見て、「あまりに、新田左中將の顔つきに似たる所あるぞよ。若し夫ならば、眉の中に矢疵あるべし。」とて、自ら鬢櫛をもてかきわけ、血を洗ひおとして見れ

ばいよくあやし。さてはとて、囊を開きて見れば、
天皇の御筆にて、朝敵征伐のこと、頼みきこゆるよし
記させ給へり。「相違なかりけるよ。」と、骸は禮をもて、
この地に葬り、首は京都へおくりぬ。これを見し高
經の喜いかばかりなりけん、この事を聞きし高氏の
心いかにうれしかりけん。逆臣どものよるこびに
引きかへて、天皇の聞しめしけん時、いかに悲しくお
ぼされけん。おもはぬ最後を遂げしことを、いかに
いとほしくおぼしけん。さらぬだに吉野のあらし
吹きすさぶ夜なく、御夢も結びたまふこと能はざ

りしに、この事ありしのは、つらかりし隱岐の小島
の荒波も、笠置の山の村時雨も、猶たのみがひありし
代とおぼしかへし給ふべし。あはれ、義貞越路の雪
と共に、はかなく消えはてしより、秋ごとにくる鴈が
ねも、春ごとにかへる翅のかけも、たゞ涙を催す種と
ぞなりし。

明治維新後、朝廷義貞の勳功をおぼしやりて、別格官
幣社に列せられて、藤島神社といふ。あはれ、生きて
志を當世に得ざりきといへども、湊川神社と共に萬
代の末かけて、人臣の鑑と仰がれぬるは、いとかしこ

藤島神社
越前國足羽郡
足羽山の東面
に在り。

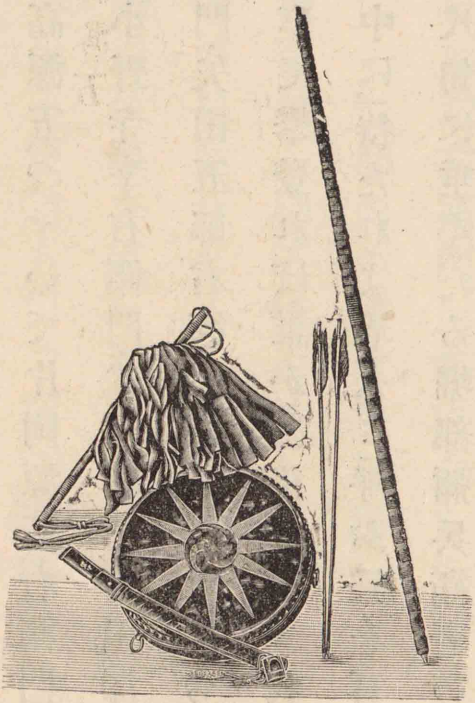
からずや。（家庭枯野の雪）

二二 義士の討入 その一 村上浪六

折しも天の賜もの、昨日より降り降りたる大雪の
いつしか霽れて、仰げば極月十四日の月、皎々と高く
空を照し、見渡せば滿地の積雪、皚々として一點の塵
埃なく、しかも曉近き寒風に凍りて、これ幸に脛を沒
せず、踏むに音あれど、四方は寂寞たる今や無聲の乾
坤、その眞白の中に物凄き一團の黑影、敵の大門を望
んで肅々と押寄せぬ。

極月
十二月の異
稱、時に元祿
十五年。

神ならぬ身、表と裏の兩門より二年越しの遺恨を含
みし四十七人、今夜を必死のますらをが、我が寢首を



義士討入の陣具

狙ひ來るとも知
らず、この大雪を
風流の友として、
忘年の茶の湯を
催し、また來る春
を契りながら、更

は闌け客は散じて、主従こゝに安けき夢の眞最中。
この寂寞たる乾坤を破りし内藏助の一聲、「かゝれ。」

の大喝もろとも二挺の竹梯子、はや門脇の長屋にか
かると見るや、武者振ひして待ちかねし一番乗の大
高源五、つゞいて片岡源五右衛門、猿の如く傳ひしは
小野寺幸右衛門、武林唯七、吉田澤右衛門、富森助右衛
門、矢田五郎右衛門、いづれも落ち來る雪を頭上に浴
びて攀登れば、誰かは後るべき、我もくくと先を争ふ
中に、「待たれよ老人。」と呼ぶ聲を耳にもかけず、ことし
八旬に垂んたる堀部彌兵衛、老の力足を踏み目を怒
らしながら、皺枯れたる物凄き聲に、「えいく。」と叫ん
で乗越えぬ。

上より外の梯子を引揚げて、内へ掛け下す間もあら
せず、氣早の面々、ひらりくくと身を躍らして飛込め
ば、原惣右衛門、屋根に立ちながら天地に照添ふ月と
雪とに邸内の棟敷を見渡して、「あれよ、それよ。」と頻に
指圖せし脚下つるりと踏込らし、どつと落ちしが一
念の早業、むくりと跳ね起きて、「かゝれく。」
物音に夢を破られし門番の足輕三人、寢惚眼に狼狽
へ出るを、忽ち引つ捕へて高手・小手に縛めぬ。
内藏助は表の門を背にしつゝ、心に神冥を拜し、眼を
四方に配りながら、身動きもせざる雪中の二王立、兩

脇には、旨を承けて指圖役の原惣右衛門と間瀬久太夫。

いづれ劣らぬ一味の中にも、豫ての定め、屋内へ斬入るべき片岡以下の九人は、固より虎穴に飛込む勢、生きて再び屋外へ出でざる覺悟、月に閃く白刃を抜きつれ、槍の穂先を争うて、降りつもりし雪を白波の如く跳ねたてながら、驀地に玄關へ走せ向ひ、おのゝ今を一期の大音聲に呼ばはりぬ。

「淺野内匠頭の舊臣ども、上野殿の御首級を申し受けに參つた。推參推參。」と云ひも終らず玄關の戸を蹴

破り打破り、わつと喚いてまつ先に躍り込みしは、小野寺十内の養子幸右衛門、流石に敵も武士なり、心得たりと立出でしを、出合頭の矢聲もろとも、横薙ぎに高股を斬つて落して、其のまゝ奥へ行かんとすれば、廣間の床脇に立並べたる幾張の弓、ばらくと一拂ひに弓弦を斷つて進みたる當意即妙、後々までも感稱の種となりぬ。

二二 義士討入 その二

西の裏門は大石主税良金、その後見は吉田忠左衛門

と小野寺十内の二人、これに従ふ面々は二十一人。表門に時を合せ、氣を合せ、それといふや、一黨中に大力の杉野十平次と三村次郎左衛門、満身の勢、猛く大槌を振うて、續けざまに三四度、吼ゆるが如き聲もろとも打叩けば、扉は破れ、門は折れて、どつと屋根より落來る雪崩を浴びながら、まつ黒に込入りぬ。東西兩門より、聲をあはせ、力をあはせ、勢をあはせて、今や室内に戰の闌なる時、大石主税、左右に向ひ會釋しながらの挨拶、

「二老の御後見もはやありがたく受けました。こ

の上は初心者ながら主税これにまかり在る、屋外のすみずみその他の人しれぬ物陰に、いかやうの敵あらうも知れぬをりから、御苦勞ながら一わたり御見廻り下されたい。」

「や、申されたぞ。さうなうて叶はぬ筈、天晴れ大夫の子息ぢや。」と、吉田と小野寺の二人、おの／＼左右に分れて立去りしが、果して人しれぬ物影より、隙を窺ひ味方の不意を覘はんとする敵五人の内、老いたれど早業の吉田忠左衛門に目早く認められ、その槍に縫はれしもの二人、また小野寺十内の槍に突伏せられ

て前後に斃れしもの三人。

十内、その槍の穂を雪中に突込み、血糊を拭ひながら見上ぐれば、隣家は土屋主税の屋敷、塀越しに固めし高張提燈を雪にてらして、ものくしき警固の體、隣家の情誼に吉良家へ助太刀するかと見れば見らるる有様に、折しも來合せし原惣右衛門と片岡源五右衛門もろとも、その塀際に近くより添ひ、おのくし三人の名を名乗りながらの大音聲、我々は播州赤穂淺野家の舊臣ども、亡主への供物を頂戴いたさうとて、今夜これへの推參、他家様へ對して毛頭の慮外は仕

らぬ。あはれ武門の御情、何卒々々このまゝ御見遁しを願ひたい。」

言葉は低く一應の禮儀を盡せども、し塀を乗越えて敵に味方をすれば、まだ冷めぬ血刀と血槍の熱を浴びせて、片つ端より打取らんと、の勢、暫し其のまゝ見上げしが、高張も動かず、人數の聲もせず、靜まり返りて我が屋敷を打守る體。

この時は既に東西表裏と屋内、屋外もはや出るほどの敵を斬靡けて、相手なき刀槍を提げながら、こゝぞと思ふ奥深き一室へ踏込みしが、有明の殘燈、うす闇

き下に、架けたる刀の金色のみ光を放ちて、枕も轉びしまゝの重ね夜具は蛻の殻、手を差込めば夢を破りし證跡、まだ微温あり。

それといふ言下に忽ち四方へ駈散りて、あらゆる室内の隅々まで捜し廻りしが、天を翔りしか、地を潜りしか、さらに影なく音もなく、いつしか東雲の横雲より白みかゝりて、夜は將に近く明けなんとす。

二三 義士の討入 その三

偕は今までの苦心も水の泡かと、一同少し弱れる折

柄老功の督勵はつと一時に氣を取直して、又もや四方八方へ手を分け足を飛ばせしが、臺所口に打續く長屋尻の間に一棟の物置小屋、外より鑰を懸けて人のあるべき筈なすと、今まで通りすがらに見遁せしも、尋ねあぐみし耳を欬て、忍び寄れば、何とやら幽かに物の動くけはひ。五六人その前に駈集りて戸を蹴破れば、奥より抛げ出す炭俵、さてはと打拂ふ間もあらせず、飛來る一人を三村次郎左衛門、矢聲もろとも袈裟がけに斬る。つゞいて飛出る者共を四方より斬斃せば、残る最後に絶體絶命の一人、小刀を抜

いて現れし眞正面より、間十次郎の槍玉ぐさと刺せば、武林唯七また肩先の一刀、視れば一個の老體なり。白無垢の小袖を血に染めて、まだ死に切れぬ氣息奄奄。

「や、白無垢の小袖。」

「たゞものでないぞ。」

「聞き及ぶ年輩。」

「若しやそれでは。」

用意の小笛は音牙えて、曉の空に響き渡りぬ。いづれも我を忘れて、駈來る一黨、前後左右より立寄りて

首筋を捉へ、その額を打守れども老の皺のみ、それかと思ふ創痕もなし。さらに引出して小袖を脱がすれば、あら嬉しや、紛ふ方なき先君が無念の御太刀筋消えもやらざり二年越し、ありくくと残りぬ。

大願成就、今更胸に迫りて言葉も出でず。せきくる涙に兩眼を曇らせ、中には嬉しさの餘り大地に打伏し、聲をあげて雪中に號哭するものあり。

表の門脇に縛め置きし番人の足輕を連來りて、いよいよ其の人と定まるや、内藏助は靜かに進み、一刀すらりと引抜きぬ。

「淺野内匠頭の舊臣四十七人、吉良上野介殿、御首級を申し受ける。」

凜たる一言、まだ息絶えぬ上野介が咽喉元、ずばと止めの一刀刺貫き、其のまゝ振返りて、

「間十次郎首級を揚げい。」

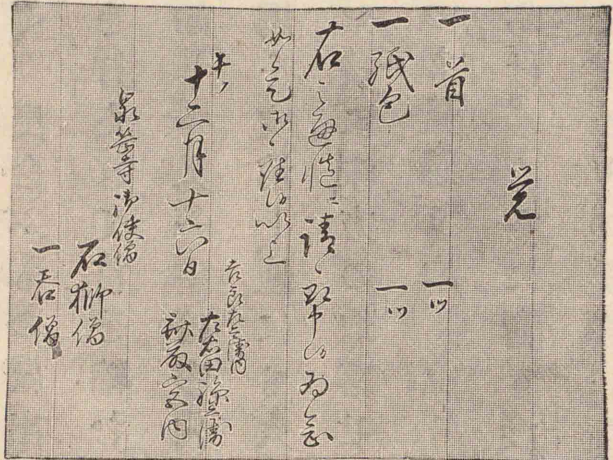
それとも知らぬ槍先の功名、身に餘る面目、武士の冥加に叶ひし間十次郎、御免なりました。と一黨に會釋しながら、打落せし首を改めて内藏助の實驗に備ふれば、取圍みし四十餘人の同志、思はず一聲に勝鬨を擧げぬ。

小野寺・片岡・原の三人、おのゝまた姓名を名乗りて

堀越しの土屋家に挨拶、

「只今これに本望相達し、上野介殿御首級を申し受けて引取るところ、先刻より不慮の騒動を御耳に入れ、何とも恐れ入る次第、一同の者に代りて御挨拶を申し上げます。」

一黨さらに兩分して、その一半は邸内を押廻し、長屋



首の請取證

長屋の戸を槍の鑢に打叩きながら「もはや引揚ぐるぞ。出合ふものは出合へ。」との聲々、されど現在の主を打たれて首を縮むる腰拔ども、息を殺して空屋の如し。又一半は室内に入りて間毎々に燃残る蠟燭を吹消し、爐にも火鉢にも悉く水を注ぎ入れ、もしや後に味方の取落せし見苦しき品やあるかと、いちいち見廻りぬ。

あけゆく空に響き渡る銅羅の音、一黨いづれも溢るるばかりの笑顔に駈集り、人數を改め姓名を呼上げし後、かねての退口、整々として裏門より立出づれば、

旭日東天に昇りて、満目の雪紅に匂ひぬ。(四十七止)

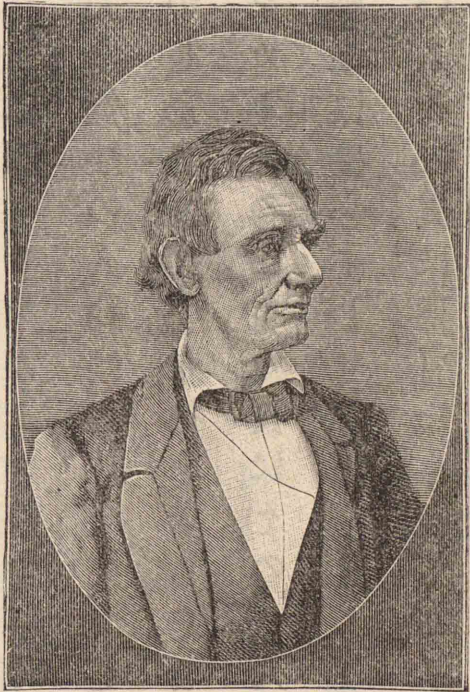
二四 リンカーンの少年時代

完全無缺の人物は、古往今來、決してありません。しかし完全に近い人物を求めたならば、アブラハム・リンカーンの如きは實にその一人であります。英雄・豪傑は必ずしも得難くはありますが、完全に近い人物は眞に稀有なものであります。

リンカーンは北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その徳は萬世に

Abraham Lincoln

Hardin Kentucky
Nolin



ノリーリン河の邊といふだけで、今日は遺跡とても殘
ンタツキー州中、當時ハルデインと稱へた片田舎の

ン - カン リ

表したいと思ひ
ます。
斯かる大人物も、
其の生れは極め
て賤しく、生れた
ところすら、唯ヶ

つてゐません。彼の兩親は極めて貧しく、家と稱す
るほどの住居もなく、丸木の小屋に住んで居りまし
た。この丸木小屋こそ、實に千古の大人物アブラハ
ム、リンカーンが、呱呱の聲を擧げた處であります。
時は西曆一千八百九年二月十二日、春雪正にとけて
梅花綻ぶる時節の事であります。
父は憐むべき日雇で、日々他人の田圃に勞役し、母は
炊事裁縫一切の家事を勤むる外に、他家へ洗濯に雇
はれたり、近傍の森や林で薪を拾うたりして、其の日
其の日のかすかな煙を立てて居りました。リンカ

リンは七歳の時から、父に随つて森に行つては、小さい腕に小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出ては、鋤を執つて耕作の手助をもして、十年餘り寸毫の暇もなく、營々として労働を續けました。

斯かる貧苦の間にも、常に彼を教へ、彼を勵まして、他日大成すべき基を作つた人がありました。それは誰でもありません、かれの母親でありました。この母親は素性の賤しきに似ず、至つて賢明な婦人で、常に人間の價値はその身の貧富貴賤によつて定まるものでなく、その精神の如何によるものであること

を教へました。そして、「御身を學校に入れて學問をさせたいは山々であるが、今の貧乏ではそれもかなはぬ。せめては母が覺えた一通りを教ふる程に、農事の暇に精出して勉強せよ。」と懇に言ひきかせて、第一に習字、次に讀方を教へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へましたが、不幸にもリンカーンが十歳の時、朝露に先だつて、脆くもあへなくなりました。彼は天を仰ぎ地に俯して歎き悲しみましたが、今は致方もないので、父とともに泣くく野邊の送りを營みました。

父はもとより、日々の勞役に追はれて、その子を顧みる暇はありません。母亡き後のリンカーンは、暗夜に燈火を失つた心地。「せめて一年半年なりとも、小學校に通ひたい」と切に父に訴へましたので、父も餘りの不憫さに、遂に之を許しました。リンカーンは天にも昇る心地で、日々九英里餘の路をも厭はず、一回の缺席もしないで、田舎の小學校に通ひました。が、哀にも赤貧の爲に、僅々九ヶ月にして、復廢學せねばならぬ事になりました。あゝ、この九ヶ月こそ、彼が前にも後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體

であります。

これより彼はまた、日々鋤を執つて田圃に働く身となりました。或は種を播き、或は草を刈る時にも、常に一二の書卷を携へてゐました。その書は綴字書、算術書、文法書の三種でありました。彼の性の伶俐なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇々に、露天の下で、教師もなくて、よくその意義を理解することが出来たのであります。斯くて朝には此等の書を携へて出で、夕には之を携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつた爲に、久しからずして、この三書を一章一句も残

George Washington

さず、悉く暗記するに至りました。十三四歳の頃、その隣にかねてその名を聞いてその功業を敬慕せるジョージ・ウォシントンの傳記を藏することを知り、讀みたいとは思ひながら、賤しい身分を恥ぢて、思をこがして居ましたが、一日、遂に思ひ切つてその借覽を請ひました。幸に其の人は快く貸してくれました。リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家にかへり、丁寧に戸棚の中に入れて置きましたが、不幸にもその夜大風雨があつて、彼の爲に一大事が起りました。彼が驚き覺めて、借

りた本のことを思ひ出し、濡しては一大事と、急ぎ取出して見た時は、もう後の祭。壁の隙間から吹込んだ雨に濡れて、さんざんになつて居ますので、大聲あげて泣きました。子供心に心配して、其の夜は終夜眠られませんが、翌朝、兎や角と案じましたが、正直に次第を述べて、罪を謝する外はないと決心して、濡れ破れてページもわからぬ書を持つて隣家に行き、泣いてわびをし、其のかはりに、二日でも三日でも勞役をさせて下さい。と頼みましたので、貸主もその心を察して、別段に之を尤めず、その意に任せました。そ

こで彼はウォシントン傳を携へて家に歸り濡れたページを丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀しました。以來讀過數十遍、この大人物の品性に感化せられて、遂にはこれを體得するに至りました。

又彼が一農家の僕となつて居た頃、或日、一人の旅客がその家に宿つたことがあります。その旅客が深更に厠に行つて、ふと見ると、庭の木立を洩れて燈火の光がさしてゐます。不思議なことと、竊かに行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長家に、一人の少年が一心不亂に書見をして居ります。旅客はこ

の意外の光景にひどく驚いたが、その夜はそのまゝ、わが室にかへり、翌朝家の主人にこの事を聞きました。所が、主人も彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を読み、夜も夜業が終れば更くるまで勉強し、わからぬ事があれば人に質し、學問を此の上なき楽しみとしてゐる。しかも温順で、謙遜で、正直によく働いて、才智もあれば、情愛もある、實に未頼もしい少年である。と答へたといふ事であります。この少年こそ、言ふまでもなくリンカーン其の人でありました。

諸君は、我が國近世の偉人、二宮尊徳の少年時代の勉強を知つて居られませう。貧家に育つても、よく勉強の功を積んで大成せる、東西の二大人物の少年時代は、實に私共の模範とすべきものであります。艱難汝を玉にす、リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として萬人に仰がれるに至つたのも、實に此の少年時代に、貧窮の経験から得た教訓の賜であると思はれます。(アブラハム、リンカーンに據る)

二五 樂翁公の少時 三 上 參次

大塚某
通稱大助、實
名孝緯。

樂翁公とは白河の城主松平定信をいふ。權中納言徳川宗武の第三子にて、八代將軍吉宗の孫なり。幼名は賢丸といひき。賢丸稟性虛弱にして、殊に幼稚の間は常に病がちなりしが、やうやく醫師灸藥の力にて成長したり。七歳の時始めて假名を習ひ、又始めて孝經を讀みたり。學問の師は大塚某とて、田安家の儒臣なりき。この頃より、はや後年非凡の人となるべきしるし見えて、嬉戯のさまも凡ての小兒の如くならず。いかでわが日の本は更なり、唐土にもわが名を知られん

史記

黃帝より漢の武帝までの歴史。漢の司馬遷撰す。百三十卷。

後漢書

後漢十二帝の事を記せる歴史。宋の范曄撰す。百二十卷。

陳蕃

字は仲舉、後漢十一代靈帝に仕へて太傅

程の偉業をなさばやと思ひ立ちしは十歳の時なりけり。幼稚の心にもかく奮勵して、行を正しうし、學を勉めければ、十三歳の時早くも自教鑑と題せる小冊子を綴りたり。之を父の卿に見せ參らせしに、卿も深く喜びて、褒美として一部の史記を賜ひ、益之を勵まされたり。一日後漢書を讀み、陳蕃が慨然として天下を廓清せん志ありといへる處に至り、覺えずはたと手をうちて感嘆に堪へざりきとか。蓋し千歳の昔、しかも異域に同感の士を得たるを喜びたるなり。この時

桓帝

十代。

靈帝

十一代。十二代獻帝の時後漢滅ぶ。

徳川氏の天下は、未だ後漢の桓帝靈帝などの時のごとく、亂離の極といふにはあらず。されども泰平年久しかりしかば、社會腐敗の兆は既に大いに現れたり。この時に此の如き抱負の大なる人の出でしは、徳川氏の爲にいかばかりの幸運なりしぞ。

氣概は溢るゝばかりなるに、身體の健康之に伴なはざる人は、概ね性急なる者なり。賢丸はかゝる人の標本とぞいふべかりける。少しく意に満たぬ事あれば、烈火の如く怒り猛りて止る所を知らず。儒臣大塚、又近侍の人々など、百方苦心して、或は婉曲に諷

し、或は顔を干して直諫せしこと度重なりければ、賢丸も漸くその累徳を悟り、いたく自ら抑へて、遂に弱冠の頃には、その性行全く豹變するに至れり。己に克つは敵に克つよりも難し。能く克己の教に従ふこそ眞の勇といふべけれ。他日英名を天下に布くほどの者は、その少き時に於ても、既にかく著しく他に異なる所あるを見る。

二十歳前後の勉強はた驚くべきものあり。朝は夙に起きて正格なる書を讀み、午餐終れば又案に向ひて申の刻に至る。それよりは師に就いて、或は擊劍

使槍、或は弓馬銃術を學ぶ。晩食の後少しく閑あり。照燈の後は則ち晝間繙きし諸書を鈔録し、又は稗史野乘などを讀む。元來健かならざる體にかく過度の事をなしけるより、稍疲勞して、肩背などに痛みを覺ゆるにいたりしかば、醫師の勸に従ひ、暫く讀書を廢したり。

空しく月日を送るは徒然に堪へず、謂へらく、「予幼きより多病なれば、壽を保たんこと覺束なし。大丈夫生をこの世に享けし上は、よしや蒲柳の質とはいへ、碌々として瓦礫と共に碎け、草木と共に朽ちなんこ

と口惜し。せめて予が生涯に成さんと誓ふことを、筆にだに残して家庭の訓ともせん」とて、乃ち病間に筆を執り、或は侍臣に口授して筆記せしめ、國本論・修身錄・政事錄などの諸書を著したり。而してその虚弱なるを憂へ、攝生少しも怠なかりしより、思ひの外に年壽を保ちたりき。されどもなほ小心翼翼として、少しも養生の規律を紊さず。侍臣に向ひて、予幸にして稍健かになりたれど、人生五十は到底望むべからず。蓋し四十年よりは長かるまじきか。さればその前に、人の爲す程の事は成し畢へて、人間の本

分を盡したし」といへる事屢なりき。

凡そ大人の事業を成せるを見るに、外より英氣の挫かるゝを防ぎ、内よりは心を勵まして尙幾年の養生を冀ひ、この事を成就せんとの志望を抱ける者多きが如し。定信の主義は之に反し、決して明日あるを頼むな。今日のごとは今日成し遂げよ。明日看んと楽しみし櫻花の、夜半の嵐に散ること多きを見ずや」といへり。定信一代の事業は、皆この決心の確乎たりしに由る。嗚呼、立志なるかな、立志なるかな。志だに立たば、愚公は山をも移せり、成功豈期し難か

愚公は云々
熱心の一念神
明に通じ太
形・玉屋の二
山を移し道を
開きたりとの
假設談。列子
に出づ。

らんや。(白河樂翁公と徳川時代)

二六 父に贈る

高山 林次郎

良太
樗牛の弟。

拜啓仕候。扱良太引續き重體に赴き候由承り、今更
驚愕仕候。萬一の時には是非々々歸國致し度と豫
てより決心罷在候故、十六日の御手紙にも歸省の事
御止被成候にも不係、乍獨斷來る廿參日に諸事繰合
せ當地出發可致、夫々にも左様告別致し候處、今日又
又御書面有之、色々私の歸郷御止被成候御意見逐次
了承仕候。篤と熟考致し候處、是非何れとも決し難

太田氏
太田資順。
牛の叔父。

く胸中自ら二個の意志ありて相戦ふ者の如くに候。
太田氏に相談せばやと存じ、今夜八時頃より出懸け
候處、閉門後にて空しく歸宿致し候。歸途も色々相
考へ候處、目下の處御意見に隨ふ方可然と存じ、一先
づ歸郷の事見合せ申候間、左様御承知被下度候。良
太の事相考へ候へば、日夕安き心も無く鬱々として
少しも樂しみ無之候。

同人萬一の事有之候節は、我が片腕を切られしも同
然、將來學問の張合も無之様被思、慨嘆千萬に御座候。
左程のこととは思はず、己の寒さに熊の皮など御無

信策
樗牛及び良太
の弟。

心申上候事、思へばく、面目無之事に御座候。起居も自在ならぬ程なれば、筆とることも叶ふまじく、信策の字の良太に似たるを見るにつけ、感慨胸にせまり獨り落涙の外無之候。兄弟の縁うすきは是非もなき天命と相諦め可申候。こゝまで相認め候へば涙にむせびて覺えず筆とめ申候。良太は何と思ひ候や、今日も猶腸胃のかりそめの病氣と思ひ居候や、私ことなど如何うはさ致し居候や、度々同人にも手紙遣し度候へども、慰め様無之心外に御座候。私の胸中宜しく御推察被下度奉願候。敬具。

米國の風物

米國東部マツサチユセツト州なる。ケムブリツヂ町の下宿にありて記されたる日記の一節。

二七 米國の風物

水上瀧太郎

一度積るとなかく、解けない雪は、日影はもとより日向でも、人に踏まれて固くなつて、晴れわたつた青空の日などは目映く輝き、家々の窓硝子に反射して、頭の痛くなる程冴えかへるが、ふと夕方から曇り始めた空模様を氣づかふうちに、又しても降り出す雪に風も添うて、夜に入つては家々をゆるがして渦巻く雪嵐になり、翌朝は膝を埋めるまで積つた中を、あまりの寒さにおのづから流れる涙に濡れつゝ、學校

へ急ぐ日が多かつた。横なぐりに吹きつける粉雪の、拂つても拂つてもかゝる目つぶしに、耳も鼻も凍るかと思ふばかり、故郷は遠く父母は遠く、一人異郷にさすらふ自分をはなむ心の起るのも、雪の朝の學校通ひのならひであつた。

十一月の末頃、落葉の上に霰のたばしる夕暮を、二度三度二階の窓から眺めて、その窓に近い並木の楡の、夙く葉は落ちてかれがれになつた梢に、物に怖れて啼き叫ぶ木鼠のあわたしく狂ひ廻るのを、我が身の事のやうに哀れがつたが、年の暮、耶蘇降誕祭の前

後は、必ず大雪で、一年中で一番楽しい日の夜、家々の窓に輝く蠟燭の燈は、一層戶外の雪を深く思はせ、何處から何處に行く櫓か、鈴の音の鋭く聞えて、やがて町筋を遠く消えて行くのは、喩へるものも無く、心を痛ましめたものであつた。長い冬の間、自分は幾度冬を呪つたかわからないが、何時か三月の初めになると、ふと蒸暑い一日が、雪や霰の日の後に續き、着馴れたまゝに着て出た外套を、腕に重く抱へて額を拭ふ氣まぐれな日が訪れる。

音も無く降り暮らす雨に、日陰の雪も少しづつ、解け

て流れて、思ひ切りよく晴れた翌朝、家々を圍む芝生の芝の、もとより褪せはしたけれど、雪にも枯れなかつた青いのが、一面に水蒸氣を立ちのぼらせ、見る間にその緑の色の萌え立つばかり濃くなる景色は、昨日まで雪に馴れた人の目を驚かすものである。

「四月の雨」と、諺にも云ふ程、溫い春雨は、柔かに此の天地に降りそゞぎ、降りそゞぎ、荒寥たる冬にあきくした自分を、して、終日窓際の椅子に何をすると、も無く、その降りそゞぐ雨脚を眺めて、眺め暮らさせる事もあつた。ふと晴れた日の散歩に、何處かの家の裏

庭に連翹の花の咲いたのを見て、愈、春のおとづれを思ふ時、故郷の我が家の古びた庭を想ひ起さない事はない。冬中霜柱に起されて、軽い埃を立てやすい春の土に、日の色の濃くなりまさる頃、その黄色い花は、今まで灰色に包まれた庭の隅の竹藪の際に、鮮かに咲初めるのであつた。私は小さな黄色い花の一片を掌にして、迫り来る春をなつかしい人の消息のやうに感じたものであつた。「雪解けて連翹の花咲き初め候。」と母へ送る手紙の冒頭に認めたが、二日三日たつと、垣根の際、うら庭の日あたり、教室の窓の下、

到る處に咲きつづいて、大空の藍もこの花の咲いた日から愈、深く澄みわたる。

けれども、此の國の春は極めて短く、榆、柏、橡、楓、樹々の梢に若芽が萌え始めると、もう夏で、見る限りの物の色が、單純に光り輝く中を、女の衣服は一齊に白く、何處の家でもあけ放した窓から、洋琴、提琴、その他さまざまの樂器のかなづる音樂が流れ出て、往來を踊るやうに聞えて來る。忽ちに附近一帯を埋めて、ライラックの花が咲き始めると、その紫、白、薄紅、さまざまのいとしい花は、町中むせる程濃い香を漂はせ、窓か

ら吹き入る初夏の風は、讀書にもあきくした時など、どうしても散歩に誘ひ出さないでは置かぬのである。(海上日記)

二八 ダンケルクの一夜その一

杉村廣太郎

恐ろしいくと思ひながら、汽車に入ると、一時に疲が出て、其の儘前後も知らず寝て了つた。ごとくと汽車の軋る音を、夢現に聞きながら、彼此三時間も経つたと思ふ頃、驛夫がダンケルクと呼ばはる聲に

Dunkerque

ハーグロー
ブ
ロンドンタイ
ムスの記者。

ぎよつとして、忽ち現實の恐怖に覺めた。時計を見
ると丁度十一時、ハーグローヴ君と共に、兎も角も歩
廊に下り立

つ。

步廊は眞暗

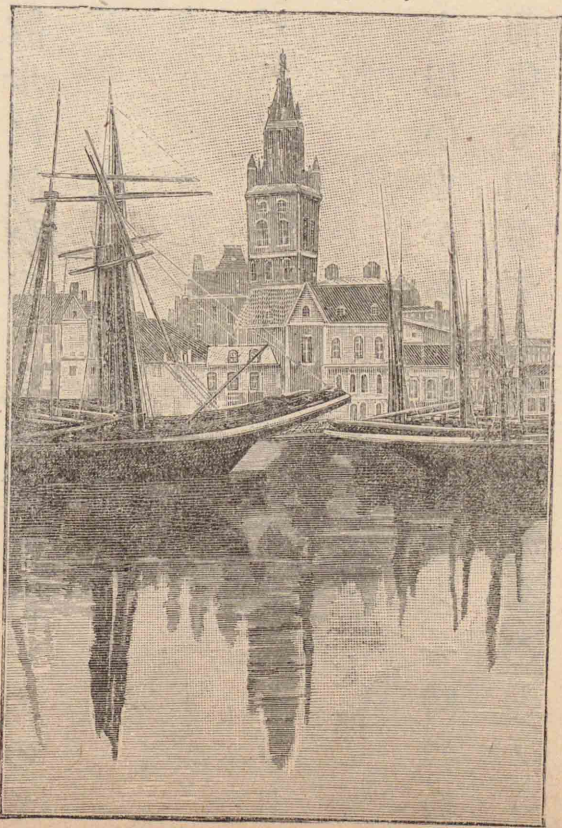
である。燈

光といふ燈

光を盡く消

して了つて、

何が何やら丸で分らなくしてある。「赤帽」と二三度



呼んで見たが、誰も應ずる者がないので、ハ君と二人
で荷物を両手に提げて、僅かに天井の硝子を洩る、
月の光と、ざわくと乗客の忍び音にさゝやきなが
ら出て行く人の氣はひとをたよりに、おづくくと改
札口の方へ出て行く。改札口には、驛夫が龕燈のや
うなものを照して、切符を受取つて居る。此の龕燈
一つの外は、一切の燈火を消して、萬一の飛行機の襲
來に備へてある。停車場ばかりでない、驛を出て見
ると、ダンケルクの町々、街燈もなければ、家々から燈
光一つすら洩れても來ない。五層六層の大廈の立

列んだ町々が、折しも冴え渡る十四日の月を浴びて、森として静まり返つた様、どうしてもアラビアン、ナイト物語などにある、怪物が魔法を使つて、一切の生類を假死させた城市を見るに異ならぬ。風はないが、凍てついた敷石の道路に、月の映ずる所を見ただけで、身内がぞつととして震へて来る。

赤帽も居なければ、馬車も自動車も見つからぬ。此の邊の様子を心得た人は、豫め身輕に扮装つて、小さな革囊一つ位を抱へて、さつさと志す方へ歩いて行つて了つたが、僕等はうろく／＼してゐる中、何時しか

停車場に五六人だけで取残された。心細いの何のといふ段でない。やゝ程経て、僕に荷物の番をさせておいて、其の間にハ君が其處等を驅廻つて、やつと赤帽一人見つけて来てくれた。一人ではとても二人の荷物がもてぬから、銘々に一つ宛持つて、大きな太刀の箱は、赤帽と二人でもやひで提げて、そろ／＼と此處を出た。倫敦でも巴里でも、燈光は暗くしてあるといふものゝ、街燈も上を黒くしたまゝ、處々について居る、店々の灯もぎらく／＼と烈しい光を傳へぬ限りは許してある、夫に人通りも少いといふだけ

で、夜中絶えはせぬ。此のダンケルクに至つては、窓から微かな光を洩らす家さへない上に、町には人つ子一人通らぬ。只町の辻々には、武装した兵士が二人かたまつて、非常を警めてゐるきり。之とても黙りこくつて、薄暗い物影で、佩劔などをがちくちくやつて居るばかり。如何さま、段々戦地に近づいて来た趣が見える。

行く／＼月を見上げて赤帽の語る所を聞けば、三日前から毎晩獨逸の飛行機が飛んで来る。昨夜も何度とやら飛んで来て、大分爆弾を落して、八人許り殺

された。今晚も宵の中から来るだらうと、皆恐れてゐたが、今になつても来ない。斯ういつて居る中にも見えるかも知れぬ。など言ふ。「これ脅してはいかんよ。夫でなくてさへびく／＼もので居る所へ、今飛行機などに来られては叶はぬ。片時も早く家の中に入らなくては、僕が殺されるのもつらいが、折角此處迄来て、使命を全うせぬのは尙つらい。急がうでないか」と、一同を促した。宜い氣な赤帽は時々空を見上げて、「まだ来ませんよ」と言ふ。はては、昨夜はあの邊から飛んで来ましたよ」と、高い家の屋根を指し

ていふ。そんな事はどうでも宜いではないかと忌
忌しくなる。僕の心細い佛蘭西語の知識では、赤帽
の言ふ事だけは、何うやら斯うやら分るが、此方から
すらく、と何か言つてやる事が出来ぬ。只ふん
ふんと聞きながら尾いて行く。
やつと目ざすザルカード、ホテルの前に着いた。

二九 ダンケルクの一夜その二

ホテルの前に着いて見ると、堅く戸を閉めて、人の氣
はひもせねば、灯の氣も見えぬ。表口から案内を求

Furnes

めたが、誰も出て来ぬので、更に裏口へ廻つて、こつこ
つと戸を叩くと、犬が盛に吠出して、遠くの方で女の
聲がする。赤帽が之と二言三言問答の後、氣の毒さ
うな顔をして、満員で部屋がないのだと言ふ。何で
も此の四五日前から、^{*}フェルヌが全村殆ど倒潰して
了つたので、國王は行在所を移されるし、住民は難を
避けて、此のダンケルクへ逃げて來た。ホテルの満
員は是が爲だといふことを聞いた。
今度は又荷物を持つて、シャポー、ルーヂ、ホテルの方
へ向はうとすると、途中で珍しくも二人の佛蘭西人

に行逢つた。之は今しもシャポール、ルーヂへ行つて、満員で斷られてザルカードへ行かうとする所だといふので、夫ならば行つても無駄だと教へてやつて、同時に此方も行つたとて無駄なことを知つた。いよく、之で僕等は行く所がない。赤帽は今一軒小さなホテルを聞いて見よう。といふ。ハ君は寧ろ停車場へ歸つて、列車の中へ泊めて貰はう。といふ。僕は赤帽に談判して、「お前の家へ一晩泊めぬか」といふ。何れも要領を得ない。人通りのない大道の真中で、大きな荷物を下して、やゝ暫く評定してゐたが、結局

山中公使
名は千之。白
耳義公使館二
等書記官代理
公使。
Havre 佛蘭西の
港。

今一度ザルカードへ歸つて、山中公使を起さうといふことになつた。
山中君は今朝ハーヴルを立つて、今晚このホテルに泊つて、僕等を待合す約束である。先刻裏口で女と赤帽との問答中にも、女は山中公使なら居られると言つたのださうだ。歸つて見ると、果して居るといふ。兎も角も家の中に入りさへすれば宜いのだからとて、一切の荷物を擔いで、山中君の部屋におしかけた。今寢よりとして居るところを、強ひて起きて貰つて、先づ荷物だけ預かつて貰ふ。八時過からは、

一切飲食物は出さぬ規則といふのを、無理に夜番の男に懇願して、麥酒と麵麩だけ取寄せて食ふ。是てや、腹も調ひ、身も暖まつたので、此處を辭して、眞暗な廊下を手探りて歩いて、其處に有合せた長椅子へ僕等は横になつた。

寒くはある、暗くはある、倫敦を出て以來の旅装束其の儘、外套も靴もつけたなりで横になつたのだから、眠られさうな事はない。其の上犬の様な大きな猫が、ぎやあくくとけたゝましい聲を立てゝ、約一時間毎に段梯子を引つ掻きながら、下から上つて来る。

それが居慣れぬ處に人が居たとでも思つたか、つい長椅子の際までやつて来て、ふんぐくと嗅いで歩く。がぶりと一口やられるのではあるまいかと、氣が氣でなかつた。

まんじりともせず、一夜を椅子の上に明して、翌朝七時ハ君と手水も使はずに食堂に出る。朝の茶を啜りながら、外面を見ると、此のホテルは、ジャン、パールといふ廣場の一方に建つて、此の廣場には、今日市が立つとて、早くから澤山な露店が列んでゐる。此處へ又買物に集る老若がひしくと詰めかけて、昨夜

の淋しさとは打つて變つた大變な賑ひである。之が戦線に近い、飛行機の始終飛んで来る町とは、何うしても思はれぬ。昨晚以來の事を考へると、丸で嘘のやうだ。同じ状態が長く續くと、成程人間の神経は痲痺するものだと思つた。(戦に使して)

三〇 水車

尾上柴舟

瀧の末なる早瀬川

岩きりとほしゆく水の

流の岸に小屋みえて

あやふくかゝる水車

たゞかりそめの板ぶきに

のせたる石も苔むしぬ

さゝぬ窓より見入るれば

守りたる人はまだ若し

山のあらしやたちぬらむ

人にしられぬ谷の花

あをき流をいろいろに

染めてもこゝによりて來ぬ

つと汲まれたる山櫻

たゞしろたへに一めぐり

めぐると見ればうち續き

のぼる椿のくれなるや

み山の春を手ずさみの

やりに汲みては汲みこぼし

ながきひねもすあかぬまに

車も老いむはた人も

三一 伊能忠敬の晩學その一 幸田露伴

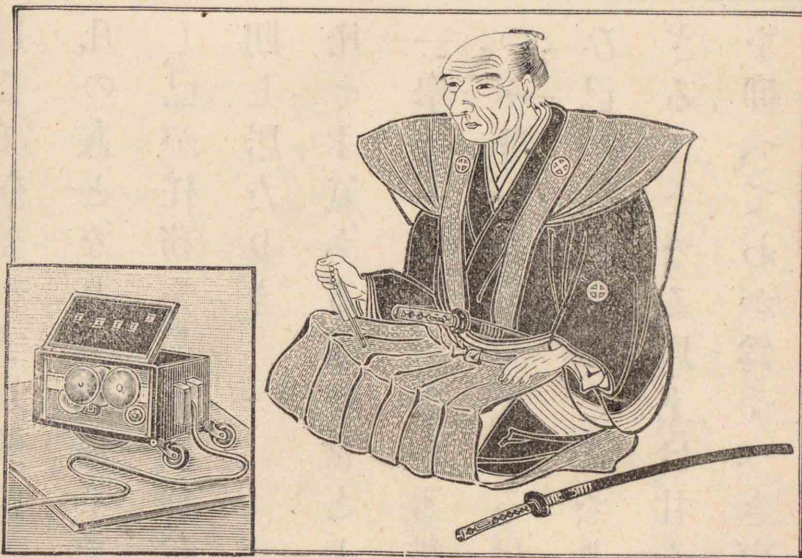
忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳に

伊能氏

生家は上總國
武射郡小堤村
神保氏、養家
は下總國香取
郡佐原町伊能
氏。

して家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡
凡の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興
し、己が任務を最も圓滿に、最も美はしく果さん事を
期し居たりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには
一舉手・一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事に
のみ身を委ねんとするは、免れがたき習なり。たと
ひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべから
ざることなる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣
を抑へてわが爲すべき事をなすは、その人曾に才氣



あるのみならず、また實に徳量ある人なりといふべし。

世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きがごとし、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免る

伊 能 忠 敬

べからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は數へも盡しがたし。忠敬が算數・曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし」といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能

家に對する義務は、是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありてはもはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時にも前途多望なる青年の春なり、爲すある人には、如何なる場合もわが力を試むべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。

後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

三二 伊能忠敬の晩學その二

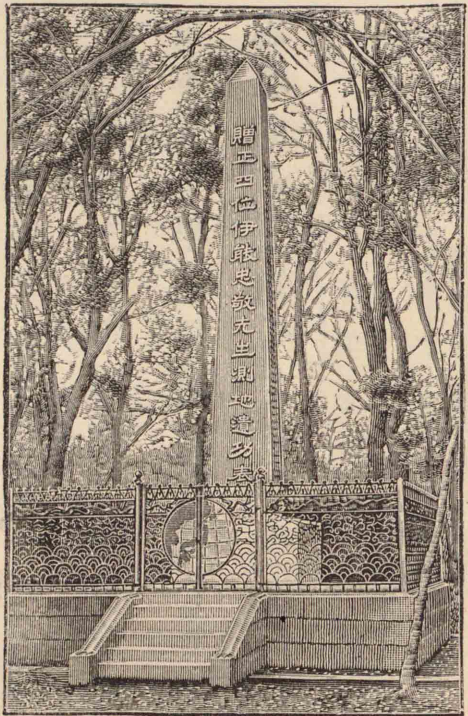
さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を出て、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異なるところは、たゞその

若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛門といふ者を召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人に及ばずとも、

なほ強ひて自ら高ぶり、敢て頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき、喜びてそれが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢、笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實に何れの世にありてもかゝる事實の存するがためなり。是を以て非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。

本來の上よりいへば、老いて學ぶはたま／＼その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可あらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。



遺 功 碑

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその五十五歳の時なりき。五十五歳といへば人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せ

んとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き心を胸裏に藏めたるによるなり。誰か日本人を早熟、早老の人種なりといふ、是、豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。(露伴叢書)

大正國語讀本(修正版)卷二終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
 大正七年九月廿六日修正印刷
 大正七年十二月十五日修正再版發行
 大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版
 全拾冊

定價
卷一・二 各金三拾四錢
卷三・四 各金三拾錢
自卷五至卷十 各金三拾錢

著者

保科孝一

東京市麹町區土手三番町三十六番地

著作
所有



合資會社
 育英書院

東京市牛込區白銀町貳拾番地
 右代表者

目録 黑甚七

印刷者

佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所 株式會社 英秀舍

發行所

東京市牛込區白銀町二十番地
振替口座(東京)七四二番

合資會社 育英書院

發賣所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

目録 黑書店

